
ムーンナイトウルフ～真夏の夜に覗く影～

新城寺ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムーンナイトウルフ―真夏の夜に覗く影―

【Nコード】

N4423B

【作者名】

新城寺ハヤト

【あらすじ】

『僕』は北国のとある高校に通う普通の高校二年生。そんな僕には幼いころからずっと好きだった道があった。それは十六年たった今もずっとそのまま残っている。終業式前のある日、僕はその道の途中にある墓地で不良に襲われている女の子を助け、一目ぼれをしてしまう。そして強引に彼女のボディガードをすることを決めた。思えばそれが僕の運のつきだったのかもしれない。目の前に襲い掛かる広大な現代ファンタジー！

Boy meets girl (前書き)

ムーンナイトウルフの第2弾です！前作よりもさらに手をかけたつもり)のバトルにご注目ください。

Boy meets girl

彼女との出会いは墓場だった。

今思うとずいぶんとムードのない場所だと思う。いや、そもそも恋の始まりが墓地だ何てムード以前の問題だ。でも、彼女の顔を初めて見たその瞬間だけは周りが墓地だろうが何だろうが関係なかった。

自分の顔が熱くなっていくのがはつきりとわかる。それはもう風邪を引いた程度のおでこの熱さなんか比にならないくらいに熱い。「大丈夫？」と聞く彼女に僕は早口で大丈夫としか言えなかった。

ことの始まりは三十分くらい前に遡る。僕の家は今歩いている場所からずつと先で、高校の最寄りにある駅から電車で帰るほうが早いのだが、この道は僕が幼い頃からずつと変わっていない唯一の道で、たまにこうして一人でゆっくり歩いて帰ってみたくなるのだ。

ただ、人気のあまりない道だから夜になると少し怖い。恐怖を後押しするかのように道中には墓地がある。この墓地も今では慣れたものだけど、小学校を卒業するまで一人で歩くのは怖かった。夏休みになるとよくここで友達と肝試しなんかしていたっけ。怖い怖いといいながらもんだかんだ言って女の子に抱きつかれたりすると嬉しさのあまり怖さなんか忘れてしまうしね。

ただ、今日だけはこの墓地が再び怖いと感じた。なぜならいつもならしんと静まり返っているあの墓地で女の子が不良達に襲われていたからだ。

どうする！

どうする僕！？ていうかまず落ち着いて考えてみる。どうしてこんな場所に不良がいるんだ？こんなところに不良達のたまり場なんてなかったはずだ。ふと、墓地の近くに目をやるとバイクが三台ほど置いてあった。やはりたまたまこの辺りを走っていただけのようだ。こんなところで女の子がいくら悲鳴をあげても近くに民家はな

いたため助けなど誰も来ない。

今、この場に居合わせた僕はどうすればいい？僕のとるべき行動は――

気がついたら僕は大声でわめきながら武器も持たずに不良達の中に突っ込んでいつていた。不良の一人に低い姿勢から体当たりをかまし一人の体勢を崩すことに成功するが、すぐに他の二人に周りを囲まれて、あつという間に僕は四つんばいになって必死に身を守るしかなかった。幸いわめき声を上げながら突っ込んでいったのが功を成したのか民家のおじさんが一人警察に連絡したと不良達を脅したため、そのまま彼らはバイクに乗って逃げていつてしまった。

「大丈夫？」

初めて声をかけられた。顔を上げると女の子が手を差し出していた。情けないことながら僕は彼女の手を借りてようやく立ち上がった。そのまま僕達は助けに入ってくれたおじさんにお礼を言つて、墓地を後にした。

周りに誰もいない静かな道に気まずい空気が流れている。勝つていたら得意気にかっこいい台詞でも言おうと思つていたけど負けてしまったのに「君こそ大丈夫だった？」なんて聞けないよなあ。

「それにしても君も無謀な人だね。喧嘩が強くないのに不良を三人も相手にするなんてさ」

情けない僕の代わりに女の子のほうがこの気まずい沈黙を破ってくれた。それにしても一応助けたというのになんていい草だと思つたが、その通りなのでまったく反論できなかった。僕だって、助けるからにはかっこよく勝ちたかったさ。そう言いたいのを必死でこらえた。「でも……」と女の子が続けた。

「助けに入ってきてくれたときは嬉しかったよ。だって、今時女の子が襲われていても助けに入らずに逃げる人だっているじゃない？君はやられっぱなしでかっこ悪かったけど、でもすごく勇気のある人だなんて思つたよ」

女の子なりの精一杯のフォローなのだろうが、今の僕にはかなり

辛いフォローだった。

「こういうのは勇氣なんて言わないよ。ただのバカさ」

情けなさや悔しさに任せて僕はついそんなことを言った。

「かもしれないね。でも、君にとってはバカでも、それで人を助けようとしたならそれは立派な勇氣だよ」

女の子はそう言うてにつこりと微笑んだ。その瞬間、僕の顔が急激に熱くなった。この時初めてお互いの顔を見たわけだが、僕はすぐに彼女の素直なその笑顔に恋心を抱いてしまった。そのまま僕は彼女の家につれていかれて怪我の手当てをしてもらった。聞くところによると、彼女はいつもこの寂しい道を一人で歩いて帰っているということだった。

「他にこっち方面に帰る人はいないの？いないなら理由を話して男の人にもついてもらうたほうがいいよ」

僕がそう提案すると、彼女は「こんなへんぴなところまで送ってもらうのは悪いじゃん」と苦笑するだけだった。

「それなら僕が送っていつてあげるよ」

「は？」

「僕はずっとここに住んでいてあの道のこともよく知っているんだ。僕の家はこの先だから気にしなくても大丈夫だよ。あの道は夜に女の子が一人で通るには危ないよ」

「でも、また不良が出たらどうするの？あたしはけっこう足速いから逃げられるけど君はそんなに速そうじゃないよね？」

「そこらへんは努力するから！それにいざというときは君を守ってみせる！」

「今日、コテンパンにされたのに？」

「それも努力する！時間は掛かるかもしれないけどきつと君を守ってあげられるようになるから！」

今日はどうしたかと思うように口がまわる。我ながら臭い台詞かもしれないけど、これだけ必死なら彼女も説得されてくれるかもしれない。しかし、僕の意に反するように彼女は首を横に振った。

「やっぱり初めて会った君にそこまでしてもらわなくてもいいよ。さつきも言っただけどあたしは足が速いから戦うより逃げたほうが早いもん」

な、何て人だろう。僕の必死の説得を軽々と足蹴にするなんて……。僕はがつくりとうなだれた。そんな僕の頭の上から「ただ」と明るいい声で彼女が続ける。

「一緒に帰る友達が欲しかったんだ。だからあたしを守るとかそんなのはいいからこれから一緒に帰らない？」

「え？」

僕は泣きそうな顔になりながら顔を上げた。てつきり完膚なきままに叩きのめされて終わりかと思っただ中での一筋の光だった。

「ほーら、そんな情けない顔をしないの！あたしを守ってくれるんでしょ？」

彼女はそう言って僕にウィンクをした。僕は泣きたいのをこらえて必死に頷いた。別にふられたわけではないのにどうして泣きそうになっていたのかわからなかった。わからなかったけど、僕はとても温かい気持ちになった。

Transfer from south

僕が墓場で助けた女の子、佐藤都子さんを助けてから一週間が経った。今日は七月二十日、世間一般的には終業式の日だ。これからしばらくの間は学校が休みになるから必然的に佐藤さんを送っていくことはできなくなるわけなんだけど……。そういえばあの人って何か部活に所属しているのだろうか。ちなみに僕はこれでも弓道部に所属している。腕前はまだまだだが、そこそこ楽しくやっている。夏休み中も弓道部は昼から夕方にかけてまでは練習があるので、もし佐藤さんが夏休み中も部活に出なければならぬのなら当然僕が送ってあげないといけない。な、なんでそう思うと顔がにやけてくるんだろう。誰もいないところで一人でにやけているなんてただの変態じゃないか。しっかりしろ羽鳥健一！集中力を保つことは弓道の、いや弓道を含んだ武芸の基本だぞ！

僕は何度も頬を叩きながら人の流れにのって廊下を歩いていく。近くの人達は僕が一人で頬を叩いていることに不審の目を向けていた。ああ、今の僕って立派に変人扱いだよなあ……。

「なあに変なことやってるの？」

「うわあ！」

後ろから唐突に肩を叩かれた。しかもけつこう痛い。後ろを振り返ると、人ごみの中から佐藤さんがひょっこりと顔を出していた。

「人前でそんなことしていると不審の目を向けられるよ」

すみません佐藤さん。残念なことにもう向けられていました。

「あ、これはその……これから終業式だから気合を入れていたというか」

「終業式に気合ねえ……」

佐藤さんは呆れたような顔をしている。それもそうか。終業式に気合を入れる意図がわからないよな。

「ああ、わかった。校長先生の話を見ま面に聞くための準備だね。」

やつぱいるんだねえ、全校生徒の中には校長の話を真面目に聞こうとする奴って。生徒会の人だって最近は居眠りをしている人が多いのに。ああ、これはあたしが前にいた高校の話ね」

「前にいた高校？」

僕がそこだけ反復すると、佐藤さんは「あれ、言ってなかった？」と首を軽く傾けながら言った。

「あたし、前は須磨ヶ岳高校ってところにいたんだ。ここからだんだいぶ南の学校だね」

ああ、そういえば四月の始業式のとくに転入生の紹介のときに体育館の壇上に上がっていたような気がする。僕がそのことを言うと彼女も「そうそうそれ」とおどけたように言った。

「向こうの人と別れるのは寂しかったんじゃないの？」

「あたしが、というよりもあたしの友達のほうが寂しがっていたかな。もう大泣きしちゃってさ」

佐藤さんは楽しそうに話す。

「ま、今でもその子とはメールとか電話とかしているからまったく声が聞けないわけじゃないから寂しくはないよ」

「そうなんだ。ところで佐藤さんは何か部活には所属している？」

「あたしはWスポーツ部^{ウィンター}に入ってるよ。向こうではなかったから興味あつたし」

「いや、Wスポーツ部があるのは北のほうでもあまりないよ。こっちではスキーとかスノーボードとかは皆が当たり前に行っていることだしね」

「へえ」

佐藤さんは興味津々に僕の話の話を聞いている。何だかいつもより顔が近い。それにちよつといい香りがする。

「羽鳥君は何か入っているの？」

「僕は弓道をやってます」

「マジで!？」

佐藤さんは下手をするとその場に固まってしまふのではないかと

思うくらいびつくり仰天していた。僕と会ったほとんどの人は僕が弓道をやっていることに驚きを感じるようで、さすがにこつちもそういうリアクションには慣れていたため特に怒りやショックは感じなかった。

「似合わないかな？」

僕が言うと彼女は大きく、しかも二回も頷いた。

ま、いいんだけどね。そして、僕はようやく彼女に本題を切り出した。話を聞くとところによるとWスポーツ部は夏の間は午前中に学校のトレーニングルームで土曜日と日曜日に筋力トレーニングをするだけなのだそうだ。

「だから送ってもらう心配はないよ」

笑顔でいう佐藤さんに僕は残念そうに「そう」とつぶやくだけだった。ということは今日からしばらく佐藤さんには会えなくなるってことか。はあ、どうして夏休みなんてあるんだろう。体育館に行くまでの束の間の会話が最後の会話になるうとは人生とはなんと皮肉なことだろう。これから二ヶ月という長いながーい別れになるなんて……そう考えただけでも涙が出てきそうだ。

結局、この日はこれ以上佐藤さんに会うことはなく長い夏休みが幕を開けた。

Summer days

「よう、最近どうした？ずいぶん疲れているようじゃないか？」

夏休みに入って数日後の部活の帰り道、電車の中で同じ弓道部に
して幼馴染の園田が見かねて声をかけてきた。

「別に、どうもしやしないよ」

「どうもしやなかったらお前の弓はもつと張りがあるぜ」

さすが幼馴染。この程度の突き放し方では折れてくれない。

「放つといってくれよ。疲れているんだからさ」

少し苛立った感じで園田から顔を背ける。しかし、園田はという
と特に気分を害した様子もなく「そういえば」とおどけた口調で続
けた。その口元は若干、自分の勝ちを宣言しているかのように緩ん
でいたように見えた。

「お前、少し前は一時期電車に乗って帰らなくなったなあ」

ギクウ。音で表すとこんな感じに僕の肩が一瞬揺れた。園田はに
んまりとした表情のまま僕に歩み寄る。

「それと何か関係があるのかなあ？」

頼む、それ以上近づかないでくれえ！

「そういや、その頃のお前のシャツ、妙にいい匂いがしていたなあ」
え、匂い？

「それと同じ匂いが終業式の日にもしたような……」

そ、そういえば終業式の前にやたらと佐藤さんの顔が近くにあっ
た。僕は急いでシャツの襟元に鼻を寄せた。

うえ、自分の汗の臭いしかない。

「ダハハハ！ぶあーかが！そんなもんするわけねえだろうが！！」
勝った！まさにそう言いたげに、いや半分以上そう言ったも同然
の表情で園田は僕を指差した。謀られた、と僕が気づいたのはその
後だった。

「やっぱり女が原因だったな」

「園田、いつから気づいていたんだ？」

「ここまで来るとこいつにこれ以上隠すことはできない。不服ながら、僕は観念して園田に聞いた。」

「お前が電車に乗って帰らなくなってからだよ。その頃のお前、妙にテンションが高かったじゃねえか。ところが夏休みに入ってから……」

「わかった、もういい」

僕は深いため息をついた。

「もういいってことは俺の推理を認めるってことだな」

「ああ、その通りだよ」

「ついでに言うとその女つてのは新学年になってから入ってきた佐藤って奴だろ？」

「何で知っているんだ？」

「弓道部の女子達がたまたま見たらしくてな。二年を中心に噂になってるぜ」

「なんてこった。既に弓道部の女子にはばれているって事じゃないか。」

「そういうことだ。しかし、佐藤を好きになるなんてお前も意外と面食いだな。というか何があってあいつと一緒に帰るようになったんだ？」

「不良達に襲われているところを通りかかったから助けただよ」

「不良に！？あの辺りに不良のたまり場なんてあったのか？」

「バイクが置いてあったからたまたま来ていただけだと思う」

「ふーん、とにかくそこでお前が助けに入っただ。しかし、お前喧嘩は最弱級じゃなかったっけ？」

「……………」

黙ったままの僕の表情を察したのか園田は「なるほどな」と頷いた。

「けっこう優しいところがあるんだな、佐藤は。だけどな羽鳥、これは俺の見立てだからあてにならないかもしれないけどあの女はや

めておけ。まず、誰にでも分け隔てなく接するし、明るいし楽しいし、悪い部分がどこにもねえ。あんな奴が彼氏なしでホイホイその辺を歩いているわけがないだろうが」

「…確かに」

僕が納得すると園田も「だろう」と得意気に言う。

「でも、彼氏のいる女の子が他の男と帰ろうとはしないんじゃないか？」

「わからねえぞ。そのうち、男のほうから報復がくるかも…」

「脅かすなよ！」

「脅かしてねえよ。特に夏休み中はお前、佐藤と一緒に帰ってないんだろ。一人になったところをやられるかもしれないぜ」

「そんなことはないって」

僕はこれ以上話がややこしくなるとあれなので適当に園田の話を聞き流すことにした。園田はこの手の泥沼話が好きだからこうやって僕を脅かしているだけなのだ。まったくもって困った幼馴染だ。

Devil fire

さらに数日が経過した。今のところ園田が忠告したような出来事にはあっていない。いや、そもそも会うわけがないではないか。佐藤さんと帰らなくなってから僕はずっと電車に乗って帰っているわけだし。ほんとに園田の忠告は今まで当たったためしがない。

「おい、羽鳥！」

噂をすれば何とやらだ。僕の背中を突いてきたのは園田である。

「何だよ、そんなに慌てて」

「いいから入り口のほうをってみろよ」

一体なんだというのだろう。僕は弓を壁に立て掛けて入り口のほうを向く……と、一瞬僕の視界がブラックアウトした。何とか正気を取り戻し、もう一度目を細めてよく確認してみる。

いた。なぜ、どうして来ているのか知らないけど彼女がそこにいた。

「おいおい、お前自分のかつこよさをアピールしたくて呼んだのか？」

園田が僕の肘を嫌らしく肘でつつく。しかし、それも気にならないほど僕の頭の中は混乱していた。そして、園田とグルになっているのか部長が一瞬僕の顔を見た後「休憩！」と言って部員全員に聞こえるように手も叩く。

「ほら、行ってこいよ。行って自慢して来い！」

「うわ！」

園田に背中を押され、僕は訳のわからぬまま彼女のほうへと歩いた。何だかうまくはめられた気がするし、もしかすると彼女もグルになっているんじゃないかという不信感がある。でも、久しぶりに会えて素直に嬉しい気もした。

「こんばんは」

僕は何気なく挨拶をすると佐藤さんも「こんばんは」と返してく

れた。

「どうしてここにいてわかったんですか？」

「だって、ここが弓道部の練習場所でしょ。市民体育ホールの三階」

「いや、そうじゃなくて今日はここで練習だったとか？」

「特にないよ。大体今日は平日だしね」

「言われてみるとそうだった……」。

「君が弓道部だって信じにくかったけど、こうして胴着着ていたり、矢を放っているのを見たりすると本当に弓道部って感じがしたよ」

「だからそう言ってるじゃないか」

「アハハ、そんなにふてくされなくなつていいじゃない。可愛いんだから」

「かわ……」

「それにしても市民体育ホールつてけっこう遠いねえ。道がわからなかったのもあつてだいぶ着くのが遅れちゃつてさあ……」

「バス停から少し離れたところにあるからね、ここ」

「田舎つて割と意地悪なところに建物を建てるんだね。前にいた街はわかりやすくてよかったよ」

「田舎の中心部はこんなものだよ。ものがないところに配置を考えずに密集させるから地理が把握しづらいんだ」

「ま、でもこうやって無事に来れたからいいんだけど」

佐藤さんはそう言つて明るく微笑む。おっと、そろそろ練習再開の時間だな。僕は佐藤さんに断りを入れて練習を再開しにみんなのいる場所へと戻った。

「あ、そうだ。もう一時間ほどしたら練習が終わるから待っていてくれない？もう暗くなっているから一緒に帰ろう」

「うん、わかった」

佐藤さんは頷くと、「頑張つてね」と明るく手を振ってくれた。何だかとてもくすぐったい感じだった。

残り一時間の練習を終え、僕は他の部員達よりも早めに着替えに向かった。体育ホールの入り口では佐藤さんがちゃんと待っていて

くれた。そのまま僕達はバスに乗って高校の近くの駅まで向かい、そこから終業式前までと同じように他愛もない話をしながらいつもの夜道を帰った。

「佐藤さんがきた時は本当にびっくりしたよ。でも、本当に弓道部に知り合いはいないの？」

「羽鳥君って意外としつこい人だね。だから何度もそう言ってるじゃん」

佐藤さんはうつとうしげにそう言うが、僕にはまだ信じられなかった。彼女が弓道部の誰に呼ばれたわけでもなく一人できただなんて。だって、来るメリットなんて何もないじゃないか。自分の部活の活動もないのにあんな寒いところまで来るなんて。

「あたしはただ、君が弓道をしている姿が想像できなかったから実物を見に行っただけ。ただそれだけよ」

どうやら本当にそのようだな。僕の目線から佐藤さんを見るに、この人はあまり嘘は上手なほうじゃない。その彼女がそこまで言うのだったらそうなのだろう。

「ごめんね、変なことを何回も聞いて」

「まったくだよ。あたしが君にその気があるなんて思ったのなら大間違いだからね」

うぐ。やっぱり僕の質問の仕方はそういう風に聞こえていたか。

少し軽蔑されたかもしれないな。

僕がつくりしていると、佐藤さんは不意に僕の制服のシャツを引っ張った。

「ねえ、あそこ見て羽鳥君！」

彼女が指差す先は――

「いつもの墓地じゃないか……」

「違うよ！お墓じゃなくて、そのすぐ近くの……」

うん？もしかして佐藤さんの言っているのは墓地の一角に浮かぶあの光のことかな。

「何、あの光？」

「……さあ？ちよつと気味が悪いなあ」

墓地の一角にぼんやりと浮かぶ球体状の光は遊園地か何かであるような人魂のようにも見えた。

「ねえ、ちよつと行つてみようよ」

佐藤さんは好奇心旺盛に僕の腕を引っ張る。

「ちよつと、危ないかもしれないよ！この間の不良達の罠かも……」
「あの不良達にそんな高等な頭脳はないって。さ、行くよ！」

な、なんていい草だろう。この間の不良達がそれを聞いたら絶対にただではすまないぞ。佐藤さんは僕の腕を引っ張りながら墓地の階段を上つて光の浮かぶ前に立つ。

道端で見たときよりこの光の玉はけっこう大きく、輝きも強い。

「すごい光だね。吸い込まれそう……」

佐藤さんはうつとりとした表情で光に手を伸ばそうとする。今度こそ彼女の手を掴んで静止させようとした刹那、何と光の玉が急に発光した。

「ひゃ！」

「あわわ！」

光はそのまま周囲一帯を光で包み込み込んだ。そして、気がついたときには元の寂しい墓地の一角に戻っていた。

「いったい今のはなんだったんだろ？」

「さあ……」

彼女の問いに僕は首を捻るしかなかった。とにかく不気味だし、早くここを離れようと提案した。そうして墓地の階段を下りようとすると――

「危ない、佐藤さん！」

「え？ひゃあ！？」

僕は佐藤さんをかばうように横に押し倒した。その一瞬後で金属が何か硬い物に当たった時のような甲高い音が墓地一帯にこだました。

「何をするんだ！」

僕は僕達にいきなり物騒な刃を向けてきた人物に怒声を浴びせた。
「え？」

僕は怒声を浴びせた後で目を疑った。なぜなら目の前にいるのは僕らと同じくらいの年の女の子だったのだ。

「いたたた、すっごく痺れたぁ……」

そう言いながら手をさする女の子のポーズは下手をしたらその手の業界に売り出せるような可愛らしいポーズである。

「ちよっと、何見とれてるのよ！」

押し倒された佐藤さんが僕の耳を強く引つ張る。

「貴方も急にそんな物騒なものを向けるなんてどういつつもり？」

佐藤さんはそう言って女の子の足元に落ちていている大きな剣を指差した。

「あたし達は別に貴方に恨まれるようなことをした覚えはないよ！」

佐藤さんの言ったことにさらに一つだけ付け加えるなら、僕達はこんな女の子を見たことはない。少なくとも制服からして違うから他校の生徒であることは明白だ。

「わ、私だって貴方達に恨みはないです。だけど、貴方から力を感じたから、だから貴方をここで倒します！」

女の子はそう宣言して剣を持ち直すと一直線に僕達のほうに走ってきた。しかし、大降りの剣をもっているせいかそのスピードははるかに遅い。

「ちよっと、落ち着いて訳を話してよ！力を感じたとか何のことだよ！」

「私だってよくわからないです！彼が力を感じたらその主を倒せと言ったから、だから……」

どうも脈絡がつかめないな。もしかして、彼女自身もどうしてこんなことをしているのかわかっていないんじゃないだろうか。だとしたら、何としても止めないと。

「佐藤さん、あの子を止め……」

止めるよ、という言葉は僕は最後まで言うことができなかった。

佐藤さんは完全にキレてしまっているようで、ぼそぼそと何かをつぶやき……「もう怒ったからね!」と叫んで勝手に飛び出してしまった。

(ああ、もう。何が何だかわからないけどとにかくあの二人を止めなくちゃ!)

僕は持っていた弓道の弓を取り出すと、二人が激突する瞬間を狙った。

Battle 1

完全に一人で突っ走っている佐藤さんを止める意味も込めて僕は練習用のお手製の矢を使って謎の女の子を威嚇する。

「ひゃあ！」

とか叫んでいくせに手にしている大剣で僕の練習用の弓矢があっさりと二つに両断される。結構力作だっただけにショックだ……なんて言っていられないか。僕は頭の中から悲しみを消しながら、佐藤さんと謎の女の子が激突する瞬間を見た。佐藤さんは相手の持っている武器にひるみもせず、真っ向から持っていたナイフ一本で女の子の隙を狙っている。僕だったらあんな大剣を持っている相手にナイフ一本で立ち向かう勇氣なんて一片もない。どうして彼女はあんなにも勇敢に立ち向かうことができるんだ？今の世の中では考えられないような珍出来事に直面しているというのに何であんなにも混乱な――

「羽鳥君、危ない！」

我に返った僕に謎の女の子の剣が迫っている。

今から弓を構えたんじゃ間に合わない！

「ごめんなさい！」

「……！」

死ぬ！？

僕は直感でそう感じた。目の前の刃はさっきよりも近いところまで来ている。のろまな僕ではまずかわせない。

ここで死ぬの、僕は……？しかし、刃は僕の体を頭から両断しはしなかった。というのも、また意味もなく謎の少女の動きが止まっているからだ。

「え？この人からは力を感じない？力を感じるのは向こうの女の人の方……？」

な、何だ？何をぶつぶつ言っているんだこの人は。とにかく今の

うちに逃げ――

ガス！

この鈍い音の後、さっきまで騒がしかった墓地に再び静寂が戻った。と同時に謎の女の子がふらつきながらその場に倒れてしまった。

「佐藤さん……？」

「大丈夫だよ。急所をナイフの柄で突いただけだから」

「よかった……殺しちゃったのかと思ったよ」

「殺すわけないでしょ。正当防衛とはいえ殺しちゃったら犯罪者だよ」

明らかに殺意をむき出しにしていたくせによく言うよ……。

「それより羽鳥君こそもう少しで死んじゃうところだったじゃない！」

佐藤さんは僕の体をペタペタと触り、異常がないことを確認した。

「もう、この馬鹿！ノロマ！ボクッとしてるな！」

「ご、ごめん……」

あゝあ、彼女を止めるつもりが何て様だろう。彼女に助けられてしまうなんて、かつこ悪いなあ。それにしても――

「この人はどうして僕達を襲ってきたんだろう？」

佐藤さんに力があるとかどうとかってことらしいが……。

「そんなのあたしのほうが知りたいよ。いきなり力がどうか言われて斬りかかれたんだから」

「何にせよ、今のうちに逃げるにこしたことはないな。こんなところで戦って墓石に傷でもついたら呪われるかもしれないよ？」

「バカ！へ、変なこと言わないでよ」

あら、ちよつと脅かしたただけなのに以外と効果抜群だった？

「へえ、佐藤さんって……」

「ほら、さっさと逃げるよ！」

僕が全部言う前に彼女はすたこらと帰り道を走っていつてしまった。

「ちよ、最後まで言わせろよ！」

ちよつとだけ勝てたと思ったのに、マイペースな人だな。

「う…」

「立てますか、妙さん？」

「あ、アーミルさん…」

妙はゆっくりと体を起こしながら周囲を見回した。

「あゝ！あの二人がいない！！」

「静かになさい。今はもう夜更けですよ」

アーミルと呼ばれた男は自分の唇に人差し指を当てて妙に見せた。

「ごめんなさい…」

「わかればいいんです。しかし、困りましたね。悪魔憑きの人間を逃がしてしまうとは…」

「あと一歩だったのにアーミルさんが急に向こうの女の子を狙えなんていうからですよ」

「すみません。あの時点では少年と少女のどちらに力が注がれたのかわからなかったんです。悪魔め、恐るべしです」

アーミルはそう言うが、妙にはなんとなく自分の失敗を悪魔のせいに行っているようにしか思えなかった。

「これからどうするんですか？」

「そうですね。今回は逃げられてしまいましたが、恐らく悪魔に憑かれたので寄る中心の行動に出るはずですよ。そこを狙いましょう」

「そうですね…。はあ、クラス委員の仕事もあるのに…」

妙は憂鬱そうにため息をつく。

そんな彼女をアーミルは仕方がないと言わんばかりの表情で黙ったまま俯いていた。

Uninvited visitor

夏休みも八月に入り、いよいよ夏本番といった感じの暑さが続いた。そんな中、今日も僕は市民体育ホールで弓道の練習に励んでいた。

「こんな暑い中、よく胴着なんか着ていられるよねえ……」

練習を見に来ていた佐藤さんはそう言うが、この太陽がサンサンとしている中を黒いＴシャツで歩いてきたアンタのほうがよくそんな服着ていられるよねといえる。が、当然それは言わないお約束。言えば何千倍にもなって反撃が返ってくる。ちなみに下は短パン風のミニスカートという、どう見たって市民体育館には合わない格好だ。

「佐藤さん、よく来るねえ」

弓道部の女の子達も佐藤さんと意気投合していて、休憩時間になるとしょっちゅう彼女と話しに来る。

「お盆前になってうちの部活が休みになったからね。弓道って見ていておもしろいし」

佐藤さんの言葉に女子達が「じゃあ、入っちゃいなよ」とか言って完全に会話に障壁ができてしまった。僕は特にすることなくぼんやりとしながら、彼女達の話聞いていた。

「よう、色男！」

近寄ってきたのは夏には余計近寄って欲しくない幼馴染の園田だった。

「今日も可愛い格好だな、都子ちゃんは」

園田の目がチラリと佐藤さんのほうに向く。明らかに見ているところは一箇所だった。

「あいつ、結構胸あるな。高二のくせしてグラビアアイドルみたいだぜ」

「はいはい、わかったわかった。まったく、お前は女の子を胸でし

が見ることができないのかよ？」

「悪いかな？男なら胸に惹かれてなんぼだぜ？でかくなきゃできることもできねえじゃんか」

「昼間からその手の話は聞きたくないんだけど」

「バカヤロ！夏にこそ燃えるのが男じゃないか！お前ももつと燃やせ！自分の内に秘めたエロスを！」

はあ、駄目だこいつは。中学生の頃から毎年この台詞を聞いている僕にとってはもう耳タコでうんざりな話題だった。でも……僕はチラリと佐藤さんを見た。園田の意見に賛同するわけではないけど、胸は大きい人なんだよな。それに顔立ちだって可愛いし。私服の彼女を見るたびに、やっぱり彼氏がいそうだなと思ってしまう。だって、こんな田舎のほうでもこれだけの人の群がりができるんだ。都市部に言ったら一発でナンパとかされそうだよな。さてと、あんまり見ていると変な目で見られそうだからさっさと視線を戻そう。その後も園田と色々話したが、何を話したのかは忘れてしまった。いつも通り夕方まで弓道の練習をした僕は園田や他の男部員達に冷やかされながら佐藤さんを送るために市民体育館を後にした。

「いやあ、今日も楽しかったねえ」

佐藤さんはそう言うが、僕らの練習を見ていてどこが楽しいんだろう。僕や他の弓道部員達にとっては好きで弓道をやっているから楽しんだけど。

「それでも楽しいよ」

佐藤さんは機嫌よく言う。

「弓道に興味があるなら夏休みの間だけでも入ったら？皆、喜ぶと思うし」

特に僕が、ですけど。

「うーん、別に興味があるから入りたいってわけじゃないんだよ。ただ、なんていうのかな、暇つぶしみたいなものかな」

「うわ、ぶっちゃけた」

僕が言っていると佐藤さんは「へへへ」と子供のように笑う。普通の

人が言うとも明らかに虫の居所を悪くするような言葉でも彼女が言う
と全然そう聞こえない。やっぱり、そこら辺も彼女の性格が成す業
なのだろうな。

「ふう、ちよつと疲れたから休んでもいいかな」

墓地についた辺りで彼女がそんなことを言った。休憩時間とき
を中心にはしゃいでいたから無理もないか。僕は了承すると、一緒
に墓地の階段に腰掛けた。

「市民体育館の椅子って硬いでしょ。そこに昼からずっと座ってい
たら佐藤さんでも疲れちゃうよね」

「佐藤さんでも、て何かひどいよね？」

「そ、そう？別に何か意識して言ったわけではないんだけど…」

「ふーん、まあいいけど」

「それより、おなか空いているんじゃないのか？ずっと座ったまま
だったし。皆との食事にも付き合えばよかったのに」

「そうしたいのは山々だったんだけど、何かおなかいっぱいだし」
女の子がこう言って食事を断る時つてもしかしたらダイエットか何
かしている時なのかもしれない。夏は太りやすいらしいし。夏バテ
というわけではないだろう。特にこの人には夏バテなんて言葉は無
縁そうだし。そう思うと何だか笑みがこぼれた。隣に座っている佐
藤さんは「君、怪しいよ？」と言うが、こればかりは笑いを抑えら
れなかった。

「！？」

何かの気配を感じ、僕は笑うのを止めた。佐藤さんもこの不気味
な気配を感じているのか顔にじんわりと汗が滲んでいる。

「ガア！」

後ろ！？幸い掛け声のようなものを出してくれたのですぐにそい
つの攻撃を避けることができた。

「な、何この人！？」

佐藤さんが叫ぶのも無理はない。なぜなら、この人は木こり用の
斧を手にしていたからだ。

「グワア！」

斧を持った中年親父は僕達を分断させるかのように二人の間に斧を振り下ろした。

「ちよつと！ただ酔っ払っていました程度じゃすまされないよ！」

佐藤さんが中年親父に向かって怒号を浴びせるが、親父はまったく聞かずに三度斧を振りかぶって攻撃に出る。それにしてもあの人のあの目は何だろう。まるで焦点があっていない。止まっているときも斧を持つ手は震えているし、口からはよだれを垂らしている。それに特筆すべき点は、さっきから佐藤さんしか狙ってこないことだ。

もしかしてこの人はこの間の女の子の仲間か！？

「佐藤さん、もしかしたらその人はこの間の女の子の仲間かもしれない！」

「あたしも今、それを考えていたところだよ。さっきからこの人、あたししか狙ってこないしね」

佐藤さんは息を切らしながら「あたしが囹になる」と宣言した。

なるほど、そこを弓で狙えって事か。確かに斧を持っているから動きは鈍いはず。僕は弓道用の弓を構えて、中年親父の隙を狙う。振り下ろした直後のわずかな硬直後がいいだろう。

「ガア！」

中年親父の振り下ろした斧は空を斬る。

「今だ！」

僕が持っている矢から手を離そうとした刹那、後ろから何かが振り下ろされ僕の背中を直撃した。

「羽鳥君……！」

あまりダメージがなかったのが功を成したのか、僕は体勢を崩した程度で膝をつきはしなかった。

「くっそー、二人いたのか……」

時間差で現れるなんて卑怯だなあ……なんて悠長なことを言っている場合じゃないな。僕と佐藤さんは一度、同じところに集まった。

挟まれたままではこいつらにはまず勝てない。

「いったい何だあんた達は！」

『……………』

反応なし、か。やっぱり操られているのか。

いったい何のために僕らを襲うんだ？

えーい、考えていたってしょうがない。まずはこの状況を打破することだけを考えよう。

Battle 2

「とにかく気絶させる程度に倒すよ!」

「りょかい!」

佐藤さんは何かのキャラクターのポーズのような敬礼をすると、持ち前の瞬発力を活かして敵の中に飛び込んでいった。

基本的に作戦はさつきと同じだ。

奴らの狙いが佐藤さんなら奴らの攻撃範囲に佐藤さんが囷として突っ込み、そこを僕が弓矢で止めを差す。

シンプルながら確実な正攻法だと思う。案の定、二人の武器を持った中年オヤジ達はすばしっこい彼女に攻撃を充てようと必死になっている。そこを弓矢で――

「射抜く!」

僕が放った練習用の矢がまずは斧を持った中年オヤジの左胸に当たる。先は尖っていないから左胸を刺されても死ぬことはないだろう。

ただ、それなりには痛いだろうけど。

続けざまに僕はもう一人のこん棒を持った男に向けて矢を放つ……

……が、正面から撃ったため、避けられてしまった。

「いったあー!!」

代わりに佐藤さんに当たっているし……。

「何すんのよ!人を殺す気!」

「あわわ、ごめん!まさか避けられるとは思ってなくて……ていうか後ろ!」

僕の警告に佐藤さんは後ろでこん棒を振り上げている中年オヤジに気づいた。

「せええい!!」

練習用の矢をそのまま武器にした佐藤さんは宙寝の男の腹部に相手の勢いを利用して突き刺した。

鋭くないとはいえ腹に大きく矢がめりこんだのだ。

一撃でノックアウトできた。

「ふう、もう出てこないみたいだね」

倒れているオヤジ達を冷たい目であしらいながら佐藤さんがつぶやいた。もうさつきまでのような怪しい気配はない。

「この人達はいったいどこからやってきたんだろう？ 帰っている途中には全然気配がなかったのに……」

「そんなのどーだっていいよ。どうせあの女が原因でしょ？」

やはり、そう考えるほうが自然なのだろうか。

確かに佐藤さんを狙ってきたことからそう考えるのが一番妥当なのだが、どうしてこんな普通の人達を使ってきたんだ？ これは僕の直感だが、あの人はまた絶対に自分の手で佐藤さんを倒すために現れると思っていたのだが……。

「何て言っている傍から……羽鳥君、墓地の階段を見て」

佐藤さんがため息をつきながら墓地の階段を指差す。最上段には、見たことのある影が一つ、月明かりをバツクに佇んでいる。

忘れようもない、あの大剣だ。

あんなものを持っているというのに、影は軽快にこちらに向かつて跳んだ。

「死んでくださーい！！」

そう言われたって死ねるものか。僕達は後ろに飛び退いた。
ドガッ！

暗くてよくわからないが、道路の一部が欠けたのではなからうか。

「あのねえ、どこの世界に死ねと言われて死ぬ馬鹿がいるわけ？」

必死で逃げ回りながら佐藤が女の子に言う。

女の子も自分で言うていてわかっていたのか眉をハの字に曲げる。
「そ、そんなこと私だってわかってますよ。だけど貴方に死んでもらわないとアーミルさんが天上界に帰れないんですよ！」

可愛い顔をして『死ぬ』を連発するなあ。

スポーティな佐藤さんとは違って、木陰で読書でもしてそんなタ

イブだな。

おっとりとした感じのほんわか女子高生なのに残念だよなあ。

「はあ？天上界？あんた、頭がやばいんじゃないの？」

佐藤さんがセーラー服の女の子を馬鹿にしたように冷笑する。

「どれだけ馬鹿にされてもかまいません。今は貴方を倒すことだけを念頭におきます」

「ずいぶんと勇ましいじゃない！やれるものならやってみなさいよ！」

佐藤さんは大剣の女の子に親指を下に向けてみせた。

Mystery girl

「言つとくけど、前みたいな攻撃はこっちには通用しないんだからね！」

佐藤さんは相手と距離をとりながら叫ぶ。

「わかつてます！だから今回は…」

『お嬢さん、悪く思わないでください。これも悪魔を倒すためなのです。大丈夫、この攻撃は貴方の魂を傷つけることはありません』
「な…！？」

「女の子から男の声！？」

若い男性独特のテノールが今、僕らの耳にはつきりと聞こえた。

「ディアブロウ！」

セーラー服の女の子が振りかざした剣から一筋の光が放たれる。

「きゃん！！」

光が命中し、佐藤さんが悲鳴をあげる。

はたまた向こうではセーラー服の女の子が「アーミルさん、やりましたよ」と嬉しそうにはしゃいでいる。

「佐藤さん、大丈夫！？」

僕の声に佐藤さんは首を軽く振りながら立ち上がった。

「いっつったいじゃない！魂に傷つかないとか言っておきながらあたしの心は超傷ついたんだからね！」

どうやら無事のような…。

まだあれだけ口が回るなら、それほどダメージは受けていないのだろう。

「羽鳥君、今度はこっちの番だよ！」

「了解！」

佐藤さんが飛び出したのを合図に僕も弓を引くタイミングを計る。一方、得意気だったセーラー服の女の子からは明らかに焦りが見えていた。

「そらそら、避けてないでさっきみたいに攻撃してきなさいよ」

「ひい！どうしてあの攻撃で倒れてくれないんですかぁ！？」

「そんなの知るかー！」

「えうゝ、あの攻撃でやられてくれないなんて反則ですう！」

「反則なのはあんたでしょうが！二回も不意打ちを仕掛けて！」

「だって、アーミルさんがそうしろって言うから……」

「まだそんなことを言うかぁ！」

「いやぁ、助けてー！！」

うゝむ、完全に立場が逆転しているな。

これはさすがに止めないと、僕達が彼女を襲ったことになりかねないぞ。しかし、そう簡単に佐藤さんの怒りは収まらないだろう。考えた末に僕は二人の間に矢を放つことで闘いを終了させた。

僕は弓を地面に置き、セーラー服の女の子の前に立った。女の子は何かされると感じたのか独特の短い悲鳴をあげる。

「怖がらないで。僕はどうしても君が佐藤さんを執拗に付け狙っているのか知りたいだけだから。お願いだから今日はその理由を話してくれないかな。お互いこのままだと気持ち悪いだろうし」

「……？」

「……………」

佐藤さんは不服そうな顔をしていたが、僕には少し思い当たるこ
とがあったのでここは彼女にも怒りを抑えてもらおう。

とりあえず、落ち着いて話ができるように僕は近くの自販機で飲み物を二つ買った。

「はい、お茶をどうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

セーラー服の女の子はおずおずとお茶の入ったペットボトルを受け取る。

「佐藤さんも、どうぞ」

「ありがと」

まだ機嫌が治っていないのかもしれないが、お茶を受け取った時

の佐藤さんは一瞬嬉しそうな顔をしたように見えた。

「さてと、早速本題に入るけど、君はいったい何者なんだ？佐藤さんに溢れる力ってというのは…？」

「それは……」

「その質問に彼女は答えることができません」

『！？』

さっきの声が女の子の中から聞こえる。口を動かしていないから彼女が言った言葉ではないようだ。腹話術とも限らないが……。

『無論、腹話術などでもありません。私は……』

言葉が途切れ、セーラー服の女の子の体がまばゆいばかりに輝く。そして、次の瞬間には彼女の横には長身の男が立っていた。

「代わりに私が答えましょう」

「わわ！ひ、人の中から人が現れた！」

「！！！」

僕も悲鳴をあげてしまいそうになったが、何とか喉の奥に押し込む。

「貴方がアーミルさん…？」

「はい」

男は小さく頷いた。

「あんた、嘘をついたわけじゃないんだね」

「は、はあ…。あの、怖くないんですか？」

さっきの驚き方とは裏腹に佐藤さんはもう落ち着いているみたいだ。

見た目どおり順応力が高い人だなあ。

「まあね。こっちにもいろいろ経験があるから」

佐藤さんはそう言って二カつと笑う。

いったいどんな経験をしたんだろう。

「まずは自己紹介から始めさせてください。こちらのお嬢さんは伊東妙さんと言います。私が憑依させてもらっている人間です。至って普通の方ですよ」

「至って普通、てどう意味ですか…」

伊東さんは怒ったように頬を膨らませてアーミルさんを睨む。アーミルさんは「言葉のあやです。すみません」なんて謝っているし、なんと腰の弱い人なんだろう。

「一応、彼女は人間であることを説明しておきたかっただけなんです。私のせいで化け物扱いされるのは耐えられませんか」

「ということはアーミルさんは人間ではないってことですよね？」

僕の質問にアーミルさんは静かに頷く。

「先の戦いで妙さんが言っていたように私は天使なのです」

「天使って言う割にはあの大きな白い羽がないみたいだけど？」

「ちゃんとありますよ」

アーミルは優しく微笑むと、静かに目を閉じた。次の瞬間、アーミルさんの背中からまばゆい光と共に純白の大きな翼が二枚開かれた。

「これでも納得してもらえたでしょうか？」

アーミルさんの問いに佐藤さんは機械的に頷く。

おそらく思考が凍結しているのだろう。しかし、それは僕にとって同じ事だし伊東さんにも当てはまっていた。

「アーミルさんの翼、初めて見ました…」

エンジェルリング

「貴方と会ったときには天使の輪を見せましたっけね」

アーミルさんはなぜか懐かしそうに語る。

「私が地上に降りてきたのは他でもない。人間界に降り立った悪魔を滅ぼすためです。一年前に人間界から悪魔の反応が現れたのを知った我々はすぐさま人間界に降り立ちました。幸い、何者かの手によつて悪魔は倒されましたが降り立ったのが一人だけとは限らない。そこで我々は定期的に地上に降りては人間界を調査していたのです。結局その反応以来、何も起こらなかつたわけですが、最近になつて再び悪魔の反応が強まり始めたのです。おそらく一年前のものよりも強い力の悪魔がやってきている。そして天上界の命を受けて私がやってきた。しかし、より強い悪魔の波動によつて天使の私は打ち

消されそうになっていた。そこで私は人間に憑依し、体の消滅を避けることを考えました。その時にいたのが妙さんでした」

「それで、伊東さんに憑依したと」

「はい」

「私も訳がわからなかったんです。そして強引に中に入られて……」

「ちよつとアンタ、この子にやらしいことをしたんじゃない……」

「そ、そんな！誤解です！いくら話し合おうとしても妙さんは応じてくれず、このままでは体が消滅してしまいそうだったのでやむを得ず勝手に……」

「……………」

「本当に申し訳ないと思っています！ただ謝罪するだけでは済まされないということもわかっています。本来は人間を守るべき立場にある天使が人間にこんな乱暴を働いてしまった……」

「初めて僕達が襲われたときに会話の内容がちぐはぐだったのもそのせいですね」

「だって、アーミルさんは私に何も話してくれなかったから」

「人間の貴方に迷惑をかけたくなかったからです。できるだけ私の手で決着をつけようと思って……」

「それが迷惑をかけていることでしょうか」

「うう、返す言葉ありません」

「それで、あの時墓地に光っていたあの球体が悪魔なんですね。だから、『力を感じる』と」

「ええ。明らかに怪しいものでしたが、まさか触る人がいるとは思いませんでした」

アーミルさんの嘆きに佐藤さんは場を誤魔化すように咳払いをする。

「悪魔の力が入るとどうなるんですか？佐藤さんに今のところ、病気のような症状はないみたいですけど」

「嘘だ！もし、そうならここに来る間に操られた人間達に会うことはないはずです！」

「え!？」

「お二人も襲われたのですか!？」

いや、よく考えれば襲われて当然か。

アーミルさんと伊藤さんは佐藤さんに憑いている悪魔を倒すためにここにいるんだ。刺客みたいものが襲ってきてもおかしくない。

「だけど、そうすると一つ合点がいかないな。どうして悪魔の力を持っている佐藤さんまで襲ってくる必要があるのだろう。僕だけを狙ってきたのならまだしも…」

「……………」

「あ、あの大丈夫ですか？」

伊東さんが佐藤さんの顔色を見て心配そうに尋ねる。そういえば、さつきからずっと静かだなとは思っていたけど。

「皆さん、気をつけて！新手です!！」

アーミルさんの警告に顔を上げて周りを確認して見ると、墓地の周りをすっぱり囲まれていた。

くそ、今日は何て忙しい日なんだ。まだ頭の中の整理が追いついていないというのに……。

「ぼやいてないでわたし達のサポートを頼むよ羽鳥君!」

「わ、わかった!」

とにかく今は戦うしかない!

伊東さんもいつの間にかアーミルさんと合体して剣を構えていた。

Empty mind

こつちが三人に対してーアーミルさんをいれれば四人だけどー
ー向こうは十人。さらに周囲を塞がれて逃げられないこの状況。

悪魔によつて操られているだつて？

なんて馬鹿馬鹿しい話だろう。しかし、それも今のこの人達の目を見れば納得せざるを得ない。いくらこつちが静止をかけてもまったく止まる気配がなく、どこを見ているわけでもない虚ろな目。包丁やフライパンによる攻撃に関しても悪魔の力が入っている佐藤さんまで含めて無差別に攻撃してくる。

「ねえ、佐藤さん。一つ質問があるんだけど？」

「何よ！？今、忙しいんだけど？」

そんなの見ればわかる。

その忙しい中を突破できる可能性があるかもしれないという話をしようとしているのだ。

「佐藤さんに悪魔の力が宿っているのならその能力を使ったりできるんじゃないの？」

「確かに、私もアーミルさんが憑いてから色々力を使えるようになった」

伊東さんがそう言つて大降りの剣を振り上げてみせる。その間にちやつかり攻撃を喰らつて「はうん」なんて言っているところは天然の悲しい性だろう。

「それでどうなの？悪魔の力は使えるの？」

「うーん、それなんだけどあたしの場合はそういうのはないみたい。妙ちゃんみたいに力がついたってわけでもないし……」

「そつか……」

悪魔の力によつて操られているというのなら、その悪魔の力を使つて操られた人達を統制できると思つただけど、それが難しいとなるとやっぱりこの人達を気絶させる程度に倒さないといけな

てことか。

「まあ、どの道変な事件に関わってしまったんだし、そう簡単には死ねないよ」

佐藤さんがナイフの柄でフライパンを振り下ろそうとしている人のみぞおちを突く。しかし、操られて痛みという感情を抜き取られているためか、生半可な打撃では効果がない。そんな時は僕の弓矢で追い討ちをかける。

「やるう」

あらかたこっちの囲みは解いた。

次は伊東さんの援助に回ろう。

僕は相手に死角を取られないように十分に注意しながら伊東のほうへと向かう。

「ディアブロウ！」

技名を叫んだ伊東さんの剣が素手の若者を縦に切り裂く。

「ちょ、伊東さん！殺しちゃ駄目だよ！」

「大丈夫です。この剣には人を殺す力はないそうです。アーミルさんが言っていました！」

人を殺す力はないと言ったってあんな風に叩き斬ったら普通は死ぬだろ。しかし、伊東さんが技を放ってから彼女の動きが極端に鈍くなっている気がする。

「アーミルさん、ちょっと力を使いすぎちゃったみたいです。力が入りません……」

「ちょ！？妙ちゃん！！」

まずい！

まだ敵が残っているというのにその真ん中でひざをついてしまった。

「ウオオオオオ！！」

スタンガンを持った若者が狂気を含んだような雄叫びを上げながらスタンガンを持つ腕を伸ばす。

伊東さんは完全に力尽きてもはや横に転がって避けるだけの力も

ない。

佐藤さんは遠すぎるし、今から弓矢を構えていては遅すぎる。

誰もが最悪の事態を予想した刹那、伊東さんの前には一人の男が立っていた。

「やれやれ、間一髪でしたね」

憑依を解いたアーミルさんがなんと素手でスタンガンを受け止めている。

「私には貴方達と戦う意思はありません。さあ、自分のあるべき場所へと帰りなさい」

な、何だこれは。

建物の中にいるわけでもないのに山彦のようにアーミルさんの声が周囲にこだましている。そして、その声を聞いた操られた人達は虚ろな瞳のまま僕達に背中を向けて去っていった。

「ふう……危ないところでした」

「危ないところでした……てアーミルさん、そんな技が使えるのなら最初からやってくださいよ！」

「そうよそうよ！あたし達に無駄な血を流させるつもり！？」

「力を出し惜しみていたわけではありませんし、貴方達の血を見なかったわけでもありません。先ほども言ったように我々天使が人間界に干渉することは許されていないのです。今、力を使ったのは私の憑依主である妙さんが危険だったからです。被憑依者が死んでしまえば私も死んでしまいます。悪魔を人間界から退散させるまで私は死ぬわけにはいかないのです」

「…勝手な理由だね」

「罵られることは承知でした。ですがこれだけは譲れません」
「……………」

「とにかく妙さんを休ませる必要があります」

「じゃ、その坂を下ったところの公園へ行こう。時間も時間だから人もいないでしょうから」

僕の提案に二人は小さく頷いた。

P a s t h e r o

伊東さんを公園のベンチに寝かせて回復を待つ間、僕達は互いに一言も口を開かなかつた。言いたいことはいっぱいあったのだが、佐藤さんとアーミルさんの険悪な雰囲気を見てしまうと萎縮してしまうのが言えなくなってしまうのだ。

「あのさ、どうでもいい話かもしれないけど…」

そう言つて口を開いたのは佐藤さんだつた。

「アーミルさん、あんたさっき一年前に悪魔を感じたとか言つていたよね？実はさ、あの事件にはあたしも関わつていたんだよね」

「なっ!？」

「それは本当ですか!？」

「本当だよ。と言つても解決したのはあたしの友達二人で、あたしは今まで闘つてきた人達と同様、操られて二人と戦わされた」

「その二人は…」

「もちろん人間だよ。妙ちゃんみたいに何かが憑いていたなんてこともなかった。ごくごく普通の高校一年生」

「詳細を聞かせてもらえませんか？」

「去年、まだあたしが須磨高にいた頃の話。入学してクラス分けがあつただけとそのクラスがまた悪い意味で独特でね。揃いも揃つてクラスの中に一歩踏み出す勇気がなかつた人達の集まりだつたんだ。六月に学園祭があつて、一クラス必ず出し物を何かしなくちゃいけないときになつても誰も動かなくて、結局先生が私たちをまとめようとしたんだけど、その時に先生も同じ光の球を見たんだつて疲れ果てていた先生はふらふらと誘われるようにその光に近づいて手を伸ばしてしまった。そうして悪魔の力を手に入れたつてわけ。もちろん、あたし達生徒はそんなことに気づきもなかったよ。しばらくして、先生が出し物の練習を提案して皆を体育館に集めたんだけど、意外と皆時間通りにきていたんだ。来ていなかったのはこ

の後、あたし達を救うきつかけとなった二人だけ。今、考えてみるとあの二人がもし時間通りに来ていたらどうなっていたんだろう、と思うよ。その時に、あたしもさっきの人達みたいに感情をほとんど抜き取られた状態の操り人形にされた」

何てことだろう。

まさか、佐藤さんがアーミルさんの言っていた一年前の事件に関わっていた人だったなんて。

経験があるというのをもこのことを言っていたのか。

「結局、その二人があたし達のクラスメート全員を倒して、最後には先生も助けた。事件の後で先生が言っていたんだけど、光の球に手を伸ばしたときに何かささやかれたんだって。先生はそのささやきを受け入れてしまつてああなつたと言っていた」

「佐藤さんが光の球に手を伸ばしたときは何かささやかけられた？」

「うつん、何も。ただ、その次の日からやたら空腹感に見舞われたんだよね。でも、お菓子やご飯を食べてもちつとも満腹感が得られない。さらに二、三日経つと今度はやたらと体がしんどくなった。

ちゃんと寝ているはずなのに体がだるくて仕方がなかった」

「それはそうでしょう。今の症状は完全に悪魔が貴方の中に憑依^{はいいて}している証拠です。食事を食べても得られない満腹感、それは物欲的な満腹ではなく魂を食することで得られる満腹感なのです。そして、その行動はもっぱら夜です」

「そういえばあたし、たまに夢でこの町を歩いているのを見たことがあった」

「じゃあ、やっぱり夜中に歩いていたってこと？」

「そういうことになるでしょうね。悪魔は魂を食した者を自在に操ることができる能力を持っています」

「食べられた魂はどうなるんですか？」

「悪魔は人間の魂をいくつ持っているかで位が決まるといいますから食してもすぐに観賞用として吐き出すのだそうです。ただ、都子

さんに憑^{なか}いている現在、精神の悪魔にそれはできないはずですよ。ですから……」

「あの人達はもう生き返らない……と？」

「アーミルさんは俯いたまま何も答えない。」

「僕達のせいで関係ない人を何人も殺してしまったのか？」

「……………」

「君がああ光を興味本意で取ったりするからいけないかったんだ!!」

「あたしが悪かった、というわけ!？」

「違うのかよ!？」

「くっ……」

「落ち着きなさい、二人とも!それに、まだ死んだとは限りません!悪魔や天使も身体や精神能力の差こそあれ、体の作りは基本的に人間同様ですよ。ですから、奴が胃にためた人間達の魂もそう簡単には消化されないはずですよ」

「それは本当ですか!？」

「ええ、ただしあまり時間はありません。それにこれ以上都子さんの中の悪魔に人間を支配させるわけにも行きません!」

「具体的にはどうすればいいんですか？」

「それは簡単なことです。昼夜逆転の生活をすればいいのです」

「それだけ?」

「ええ、それだけです。今も昔も悪魔が光に弱い事実は変わっていません。ですから昼間に都子さんが寝ていても悪魔は外に出られないわけですよ」

「そんな古典的な方法で悪魔が外に出るのを防げるとはなあ……」

「まさに意外としか言いようがない。」

「でも、それって結構大変なんじゃない?」

「そう?夜更かしくらい皆するでしょ?」

「そりやするけど、これだけ戦った後で佐藤さんは眠くないの?」

「そう言われると、眠いような……」

「わわ、寝ちゃだめだってば!」

「わかってるよお…。だけど、急に疲れが出てきて…」

「まさか、今の話を悪魔が聞いて都子さんを眠らせようとしているのではないでしょうか？」

「そ、それってまずいんじゃない？」

「ええ、大ピンチです！都子さん、起きてください！」

「佐藤さん、起きてよ！朝ですよー！」

彼女の肩を大きく揺さぶっても佐藤さんは眠そくに唸るだけであつた。起きてくれない。

「このまま悪魔が出てきちゃったらどうするんですか！？」

「対決するしかないでしょう。ただし、私は本来の力を使えない。

妙さんもこの分では起きるのはまだ先になるでしょうし…」

非常にまずいぞ。

今までは佐藤さんと伊東さんが攻撃を凌いでくれている間に僕が弓矢で後方から支援するという形でやってきた。しかし、今は本来の力が使えないアーミルさんと僕だけ。

アーミルさんがどのくらい耐えてくれるかわからないけど少なくとも二人と一緒に戦ってきたときより格段に戦力が落ち、隙も大きくなるだろう。このままでは確実に悪魔を止めることができない。

「佐藤さん、頼むから起きてくれよ！！」

「健一君！このままでは彼女の意識を悪魔に取られてしまいます！何か強烈な刺激を彼女に与えられれば目覚めてくれると思うのですか…」

「強烈な刺激…！？」

いきなり強烈な刺激と言われても困る。

まさか弓矢で威嚇射撃なんかしたら強烈過ぎるだろうし、何より当たってしまったては意味がない。でも、僕の手持ちの道具をいくら探したところで彼女に強烈な刺激を与えることなどできない。

いや、あるぞ！

瞬間的に僕の頭の電球が光った。

Broken heart

僕はだらしくベンチの上で横になっている佐藤さんを見下ろす。何て幸せそうな顔をして寝ているんだろう。本当ならこのまま幸せに寝かせてあげておきたいけど、場合が場合だよな。

僕は目線を幸せそうな佐藤さんの顔からゆっくりと彼女の胸の辺りまで持っていく。

もう一度問うぞ、僕。この場合は仕方ないんだよね？

はい、仕方ないと思います。

「何が仕方ないんだ〜!!」

僕は思わず絶叫してしまった。

いや、でもこの場合は絶叫しないほうがおかしいと思う。これからまさか眠っている無抵抗な女の子の……を触ってしまおうとしているなんて。

「ゴク……」

唾を飲む音がいつもの何倍も大きく感じられる。

『高二のくせしてグラビアアイドルみたいだぜ』

昼間の園田の言葉が思い出される。確かに、あの時はみんなの前だから興味がないフリをしていたけど、いざ間近で見ると高校二年生にしては豊満すぎるといっても過言ではない。

それを今から……？

だ、駄目だ！

そんなことをしてはれたら殺させるくらいじゃすまないぞ！？何ていったって女の子の大切な部分を鷲づかみにしようとしているんだ。

でも、よく考える羽鳥健一。この場はそれを実行する以外に強烈な刺激を与えることはできないんだ。佐藤さんが、悪魔に乗っ取られて死んでしまうくらいなら、僕が死んだほうが何倍もマシだ！

きつと。

絶対に！

神に誓って！！

「健一君、急いで！！」

アーミルさんの顔がいよいよ深刻なものになる。

このチャンスを逃すな！

いけ、健一！弓道の基本は集中力だ！

この両手に全ての力を集中させるんだ。そして、思い切り握ることで強烈な刺激とせよ！

「だりゃああ！！」

ムニユウ。

ああ、これが女の子の胸の感触……。

母親のものですら触った事がないのに。でも、きつとそれと佐藤さんの胸の感触は月とスッポン、いや宇宙の星々とミジンコほどの格差があるに違いない。

ほら、よく言うじゃない？

年を取ると垂れてくる、て。そんなものと比べること自体が佐藤さんに失礼と言えよう。でも、これは本当に……。

「ちよつと、羽鳥君……」

怒気を含んだ佐藤さんの声が聞こえる。ああ、目を覚ましてくれたんだ。これで佐藤さんが悪魔に乗っ取られないで済んだんだ。

隊長、僕は任務を無事に完遂したのであります。しかし、その横ではアーミルさんが手で顔を覆い、いつの間にか起きていた伊東さんも口に両手を当てて啞然としている。

「あ……」

僕はようやく我に返れた気がする。なぜなら、佐藤さんの怒りが富士山の大噴火のように今にも爆発しそうだったからだ。

「君は何をしているのかなあ……？」

「あ、その……こ、これには訳があつて……」

「問答無用……！」

ドゴォ！

佐藤さんの渾身のアッパーを喰らい、僕はそのまま宙を舞って地面に倒れる。

こうなるとわかつてはいた。

いや、これはこれで幸せかもしれない。

佐藤さんがあんなに恥ずかしそうに顔を赤らめているところを間近で見ることができたのだから。しかし、幸せは長くは続かない。倒れた僕の上に佐藤がのしかかり柔道かプロレスのごとく、両手両足の自由を奪い、えびぞりの状態にしてきたのだ。

「こおおおつの、変態があ……」

「いたたた！さ、佐藤さん……痛いです！でも、痛くない！」

「訳のわからないことを……！」

「ぎにゃあああ！もつと僕を殴って……！」

「馬鹿か貴様はあ……！」

結局、僕は十数分彼女に幸せの鞭を浴びせてもらいましたとさ。

「うーん、確かに強烈な刺激を、と言いましたがまさか彼が禁断の

行為に手を出すとは思いませんでした」

「羽鳥君、そんなことをするようには見えなかったのに……」

「仕方ないですよ妙さん。やっぱり、彼も男の子ですから」

「えうゝ。私にはついていけないです……」

「ついていかなくていいわよ、こんな変態男なんかに。妙ちゃんもひどいことされるかもしれないよ？」

「ふえ！？そ、それは嫌です」

「い、伊東さん。そんな目で僕を見ないでください！」

「見ないでください……というほうが無理なのは？」

アーミルさんが呆れ顔で僕に言う。

「アーミルさんもそろそろ僕で遊ぶのはやめてくださいよ。このままだと僕の名前が変態男になってしまっじゃないですか」

「合ってるじゃん」

冷ややかなまなざしで僕を睨みつける佐藤さんに僕は押し黙るしかなかった。

それを見たアーミルさんも流石に気を悪く思ったのか一連の出来事を話して僕のした行為は誤解だということを説明した。

「というわけで健一君は仕方なく貴方の胸に触ったというわけですよ」

「だから僕は故意にやったわけじゃないんです！お願いだから信じてください！」

「と言われても……」

僕らの弁解に佐藤さんは相変わらず冷ややかな視線を僕に浴びせたまま、伊東さんもちかいら不満そうな顔をしている。

「弓矢を射るのも当然ですけど、もう少しやり方があったんじゃないでしょうか」

なるほど、最もな意見だ。

……じゃなくて！

「でも、あの時はもうこれしか思い浮かばなくて……！」

「どんな理由であれ、女の子の胸を触った事実が残りますよ」

伊東さんの冷たい一言に僕は言葉を詰まらせる。

「……どうしたら許してもらえるんですか？」

「無理だね」

佐藤さんが冷たく言い放つ。

「あんたがしたことはあたしの人生で生涯傷に残るよ。恨んでも恨みきれないね」

ああ、これは完全に嫌われたな。

伊東さんの言うとおり、理由が何であれ僕は佐藤さんの胸を触ってしまった。

これだけは変えようのない事実だ。

「あたし、帰るよ」

気まずい空気の中、佐藤さんがふうつとため息をつきそんなことを言った。

「佐藤さん、送っていきま……」

「変態男に頼るほどあたしは廃れた女じゃないよ。二度とあたしに近づくな！」

それは確実な別れを意味していた。あんなことをしたら絶対にこの言葉を聞くとわかっていたのに。

去っていく佐藤さんの背中を呆然と見送りながら、僕はがつくりとその場に両膝をついた。

後ろを振り返ったらいつの間にか伊東さんとアーミルさんもいなくなっていた。

僕は今、完全に一人だった。

「どうして、こんなことに……」

僕の頬を一本の筋が伝い、それはやがて僕の手の上に落ちる。

十六年間生きてきて、初めて恋をして、初めてふられた日の夜だ

つ
た。

Desolate world

三日が経った。

僕はどこへも出歩かず部屋の外からも出なかった。

夏風邪だと言って両親すら部屋に入れなかった。

朝になつても昼になつても僕の部屋のカーテンは閉じられたまま、まるで外の世界との交流を断つかのように。

園田が見舞いに来たこともあった。しかし、母親が上手く対応してくれたのかは知らないがあいつが部屋まで上がってくることはなかった。

(失恋……したんだよね?)

未だに実感が湧かない。

頭はずっとぼんやりしていて、今ここにこうしていることは夢の出来事のような気がしてしょうがない。夢から覚めて市民体育ホールに行けばいつものように佐藤さんが観客席に座って弓道の練習を見に来るだろう。早く夢が覚めてほしくて何度もベッドに入って目を閉じた。しかし、数時間後に目が覚めてもカーテンで外との交流を断った僕の部屋に戻るだけだった。

夏なのに分厚いカーテンを四六時中閉めっぱなしだから僕の部屋はとてつもなく熱気がこもっている。

四十度くらいはあるんじゃないだろうか。それでも、僕の周囲は真冬に吹くような乾いた風が吹き荒れていた。ちっとも熱くないので分厚い布団を取り出してさらに上に着て寝た。そして、三日目には本当に風邪を引いた。

急に気分が悪くなって夜中にトイレに入って何時間も吐いた。

いくら吐いてもすすきりしない。

何でだろう?

僕は一体、何がしたいんだろう?

さらに四日が経った。

風邪も治ったし、部活に出ることにした。色々理由をつけて一週間も休んでしまったからさすがに行かないと皆に迷惑をかける。

足取りは正直重かったが、一週間ぶりの外の空気はとっても美味しかった。ちゃんと暑さも感じる事ができた。

市民体育ホールでは園田を中心に皆が僕を温かく迎えてくれた。

（皆には夏風邪を引いたと伝えただけ）

自分でついた嘘を忘れていた。後半からは本当に夏風を引いていたから無理もないことか。

数人の女子生徒が「そうそう」と言いながら僕に近づいてきた。

「羽鳥君が夏風邪で休んだ日から佐藤さんも弓道を見に来なくなっただよ」

「羽鳥君、何か聞いていないの？」

「え？どうして僕に伝える必要があるの？」

僕の答えがおかしかったのだろうか。彼女達はきょとんとしていた。

「おいおい皆、変なことを言うなよ。いちいちそんなことを友達のこいつに報告するわけないだろ？こいつの彼女ならまだしも」

園田が肩をすくめながら会話に割って入ってきた。

「でも、羽鳥先輩と佐藤さん、仲が良かったですよ？」

「うんうん。あたし達もすっかり付き合っているんだと思っていたけど違ったの？」

「変な誤解をしないでくれよ。僕とあの人はたまたま家が近くだったから一緒に帰っていただけだから」

「そうなんだ…」

「絶対付き合っていると思ったんだけどなあ」

どこか不満そうな顔をしながら女子生徒達が練習場に戻っていく。その場には僕と園田だけが残った。

「……………」

「……………」

お互いに何も喋らない。

「……お前、やっぱりふられたのか？」

園田が言いにくそうに口を開いた。

「お前が来なくなってから一度も彼女がここに来なくなった。今日はお前が来ているというのにさ」

「知らないよ。あの人にもいろいろ事情があるんだろ？ だいたい、僕が来なくなつたと同時にあの人にも来なくなつたからって理由を一緒くたにするなよな」

「やっぱり、ふられたな」

こ、こいつは言いにくいことを二回も……。

心の中ではお湯がコンマ五秒で沸かせられるくらい、僕のはらわたは煮えくり返っていた。しかし、ここで腹を立てても意味がないので僕は黙って園田の次の言葉を待つ。

「以前のお前は、佐藤のことを『あの人』とは呼ばなかった。急に呼び方が変わったって事はふられてはいないにしろ何かそれ相応のことが……」

「お前に何がわかるんだよ……？」

僕は低い声で園田の言葉を遮る。

「知った風なことを言うんじゃない！ お前に僕の何がわかるって言うんだよ！」

全身に力を入れて僕は怒りを園田にぶつけた。しかし、園田は僕の顔を見てこうつぶやいた。

「俺はお前の幼馴染だ。お前の全てではないにしろ、お前のことはわかつたつもりでいる」

「ふん、『つもり』だろ？ 本当に僕のことをわかつてくれてないじゃないか」

「その通りだよ。でもな、こういう時くらい言いたいこと、叫びたいことを口に出せばいいんだよ。俺の知っているお前は物事を何でも溜め込む癖があるからな」

「……………」

「溜まっているのなら出しちまえよ。いつまでも溜め込んだままだ

とまた引かなくてもいい夏風を引いちまうぜ？」

園田はやっぱり気づいていたのだ。

最初の三日間の病気は嘘だったことに。

くそ、僕は何でもかんでもこいつの思惑通りに動かされているんだな。でも、それが――

「それが、返って癩にさわるんだよ！僕のことなんか放っておいてくれ――！」

人間はどうしてこうも愚かなんだろう。明らかに自分の間違いを頭で認めているのに、体がそうは言わないのだ。

「やれやれ……。やっぱり普段の態度がアレだから信用されなかったか。せつかく月9ドラマのワンシーンっぽくなってきてたのに。あ、でもあれって女と男が対峙する設定だったっけか？」

今日で夏休み前半も終わり、部活も少し早めに切り上げられた。

部長と園田に三人でどこかに遊びに行かないかと誘われたが、そんな気分ではなかったので丁重に断り一人帰路につく。しかし――

『溜まっているのなら出しちまえよ』

園田の言葉が思い出される。確かに、このまま家に帰ってお盆を過ごしたのではこの一週間でやってきたことを再び繰り返してしまいうる気がする。自分でもわかっていたことだが、あんな不健康な生活はもうこりこりだ。そうなる前に――

「遊びに行こうかな……」

電車のホームに立ってからふと、そんなことをつぶやく。ああ、こんなことなら部長や園田と一緒に行けばよかったな。でも、今更彼らのところに戻るのも気が引けるし、一人でいたい気分であるこ

とは変わりはない。

結局、僕は電車に乗って自分がいつも帰ることにした。と言っても、帰るのは自分がいつも降りている駅までだ。田舎町だが、それなりにプレイススポットと呼ばれるようなものはある。ひとまず、ここから歩いてすぐのところにあるゲームセンターにでも行ってみることにしよう。

僕が行こうとしているゲームセンターはゲームセンターと呼ぶには少し寂れて客も少ない。

店舗も小さいからそんなにゲームの台数もない。まあ、あまりお小遣いに余裕もないし格闘ゲームでもやりますか。あそこの台はもはや、園田とカンプ（完全コンプリートの略）してしまったから、コンピューターの動きなど手に取るようにわかる。わざと手加減してゆっくりと時間を消費することにしよう。

結局、二クレジットで四十分ほど時間を潰した僕は次の娯楽場所を求めて彷徨うことにした。と言っても、駅の近くにゲームセンターがあること事態が珍しいような田舎の町だから、そうそう娯楽場なんてない。まあ、こうして歩いているだけでも十分気は紛れる。

しかし――

（歩くだけだとしても限界があるな）

僕は駅へと引き返すと、学校へ行くためにいつも降りている駅に電車で向かうことにした。

（やっぱりこっちのほうが一応は町らしいよな）

少しずつ太陽が西に傾きつつあるが、まだまだ夜の賑わいが絶えない駅の雑踏に身を投じ僕は再び娯楽場を求めて歩いてみることにした。

Pursuer and the pursued

すっかり太陽が落ちた現在の時刻は夜の九時。

三時間前には人で賑わっていた駅前もすっかり静かになっている。この賑わいが冷めるのが早いところは所詮田舎といったところだろうか。まあ、失恋の悲しみを癒すにはちょうど良いと言えるな。

歩道橋の上から見る景色にも飽きたし、そろそろ両親も心配している頃だろう。僕は遠くに見える都市の夜景に別れを告げ、きびすを返そうとした。

「!？」

背中を向けた時に一瞬見えた人影。

あれは、佐藤さんだ。

誰かと一緒にいるみたいだ。

「……………」

しばらく呆然とその様子を見ていたが、ハッと我に返る。何をそんなにマジマジと人の様子を見ているのだろうか。

あの人と僕とはもう何の関係もないんだ。あの人が新たに誰と付き合っているという関係もないんだ。

関係ないんだけど――

（もう一つの人影もどこか見たことがあるような気がするのは気のせいだろうか）

何で佐藤さんとあいつが関わっているのかは知らないが、付き合いっている奴があいつとなればちょっと気になる。

僕はそのまま歩道橋の反対側に向かって走り出した。

あたしは今、とてもつなくピンチに立たされていた。
何があったのか……？

簡単に言えば人に追われている。ただし、『ただの人』ではなく、あたしの体に憑いている悪魔によって操られた人にだ。あたしの中の悪魔の仕業なのにどうしてあたしが追いかけれないといけないのだろうか。

そこだけは何度そういう目に遭っても納得できない。まあ、その度にあたしのしなやかでバネのある足で逃げてきたからいいんだけど、今回あたしを追いかけているこの人は何か違う。何が違うのかなんて言われてもわからないけど、何だかあたしを目の仇にしているような――

「くっ……」

しまった、逃げ込んだ路地は行き止まりだったか。こんな時に限ってしょうもないミスをしてしまった。

「逃げ、られな……い……ぞ？」

「へえ、今日の人は多少喋れるみたいね。でも、人を追い詰めておいて逃げられないことを質問されても困るんだけどなあ……」

流石に今回はちょっとやそつとのことじゃ逃げられないか。

人通りが少なく裏通りだけど、万が一こんなところで一揉めしているところを見つかるわけにはいかない。

「適当にやりあってさっさと逃げなきゃ」

あたしは姿勢を低くして相手の出方を待つ。それにしても、気になるのが対峙している相手とその武器。あの鞆はどう見てもうちの高校の鞆だ。

（予想としては部活帰りか何かの人を悪魔が操ったんだろうな）

もう一つ気になっているのは対峙している相手その人だ。さっきは逃げるのに夢中だったから顔もよく見なかったけど、この人は確かあの変態男の友達だったような気がする。

「貴方も大変だねえ。あんな奴の友達やっているなんてさ」

「グ？ガアアウ！」

一応反応してくれたけど、その直後に襲い掛かるのは止めてほしいな。でも、ただの体当たりなんか元須磨高スマップのバックダン

サーだったあたしにとっては軽く避けられる。

変態男の友人は肘からバランスを崩してよろめいている。

「じゃあネ」

あたしはそのまま全力疾走をして路地を抜け出そうとしたのだが、逃げようとしていたあたしの足の下に何か硬いものが滑り込んだ。き

た。

「うきやあ！？」

そのまま滑って転ぶ。

「あいたたた。今のは何？」

あたしの下敷きになっているものを引っ張り出してみる。

「鞆？」

鞆を滑り込ませて転ばせましたか。

頭がいいなあ……。

「やッパ、か…ワイイ…」

ありがとうございます……と本当なら素直に喜びたいところだけど、言っている人がこんな危ない目をした人なのだから素直に喜べない。というか襲ってきた奴に可愛いと褒められて浮かれるあたしも問題あるよね。

ていうか、何ちよつと！？

この人、あたしの上に乗っかるうとしているわけ！？

（流石にこんな仕打ちは聞いていないよお！）

そうだ。

よくよく考えればこの人はあの変態男の友人。

この人が変態でないわけがないんだ。

流石にこれはちよつとピンチっぽい。

「たすけて……」

怖くて声が出せない。

こんな、こんな終わり方って酷すぎるよ。

「フオオオ！」

「いやあああ！」

やっと悲鳴をあげることができた。しかし、男の体は容赦なく上から迫ってくる。

あたしはあまりの怖さに思わず目をつぶった。
どうしてあたしの男運ってこう最悪なのよ！

声にならないような声を上げて、あたしは必死に身の危険を周囲に伝えた。当然聞こえるわけではないのだが。しかし、まさか効果があつたのか相手はいつまで経ってもあたしの上にのしかかつては来なかった。

恐る恐る目を開けてみると、男は斜めに倒れようとした体勢のままピタリと動きを止めている。よく見ると、男の後頭部には矢のようなものが刺さっている。

（マジですか！？）

誰かが助けてくれたのだろうけど、さすがに後頭部を矢で射抜くのはやりすぎだよ！

死んじやってたら貴方が刑務所に入れられちゃうんだよ！？

（ちよつと待てよ…）

混乱する前にあたしは平静を取り戻し、落ち着いて考えてみる。
こんな時間に人通りのない裏路地ではない高校生のあたしを助けてくれる人がいるだろうか。普通の大人だったらけしからんとか言っ
てそのまま放つとかれそうなのに。まさかとは思うけど……。

「あんた……なの？」

あたしは男の向こう側にいる人影に尋ねてみる。

「佐藤さん、大丈夫ですか！？」

向こうにいる人影が叫ぶ。

やっぱりあいつの声だ。まったく、どうしてあたしはつくづくこんな男と縁があるのだろう。

（うん？）

あたしはさらによく考えてみることにした。

どうしてあたしがあいつの友人に襲われそうになったら都合よく助けに来てくれたのか。どう考えても行き着く答えはひとつしかない

い。

「ちよつと変態男！こんな下手な芝居であたしの機嫌を治そうってわけ？」

「え？な、何を言っているんですか！？」

「ああもう、頭悪いわね。だから、こいつはあんたの差し金かって聞いてんのよ！！」

「そんなわけないじゃないですか！歩道橋の上から佐藤さんが園田といるのを見たんだ。だけど、何だか様子がおかしかったから降りて確かめようと思ったんです！」

「それにしてもやけにタイミングがいいじゃんか？」

「僕だつて急いで駆けつけてきたんです！あと一歩遅かったよりかはマシでしょう！？」

う、それは言えてるかも。

「じゃあ、こいつはあんたの差し金じゃない。そういうこと？」

「ああ、その通りです！園田も悪ふざけは止める！佐藤さんにこれ以上危害を加えるつもりならいくらお前と言えど……」

「け、ン、一？ど、して……おま、えが？」

「園田？ま、まさか……」

「そうだよ。園田君は悪魔に操られている」

「そんな。今日の部活のときまで普通だったのに……」

「とにかくあたしはこいつからもあんたからも逃げないといけないからね。まずはてつとり早く手前から片付けていきましようか！」

「そ、そんなあ。僕は佐藤さんの……」

「うつさい、だまれ！来るよ！」

矢のダメージがすっかり回復したのか園田君はすっかりあたしを襲う気満々の様子である。こんなところで無駄な青春を過ごすわけにはいかないんだから！

strange boy

一体全体どうなっていると言っんだ。

どうして園田が佐藤さんを襲っているんだ？

それにこいつまで悪魔に操られているなんて。

昼間まで普通に接していたはずなのにどうして？

ともかくにもこれ以上こいつに佐藤さんを辱めさせるわけには
いかない。何としてでも止めなくちゃ！

「ウオおおー！」

園田は鞆を大きく振りかぶって僕に殴りかかる。

まずい、弓を構えて盾にするにはいささかあいつの攻撃のほうが
早い。でも、もしかして振り下ろせるのが早い分、中には何も入っ
ていないんじゃないだろうか。僕はあえて、園田の攻撃の直撃を受
けてみる。

案の定、振り下ろされた鞆は僕の頭の上でパコンという可愛らし
い音を出しただけでたいした痛みは襲ってこなかった。

「く……」

「残念だったな、園田。その鞆じゃ盾にはなっても武器にはならな
いよ」

「くソー！」

園田は鞆を投げ捨てると、今度は鍛えられた拳で僕を殴ろうとす
る。しかし、後ろからの素早いナイフ裁きでその動きを封じられる。

「あたしがいることも忘れないでね、園田君？」

「チィ……」

しかし、園田はこのくらいでは諦めない。僕達二人と距離をとり、
じつとこちらの出方を伺っている。

少し時間が経過しても園田はまったく動かない。

こちらから仕掛けるべきか？しかし、向こう側にいる佐藤さんが
小さく首を横に振っている。

やはり、園田の動きを待つしかないのか？

「あ！アレは何だ！！」

「え？」

僕は園田の声につられて真上を見上げるが、空にはじつとりと蒸し暑い夜空にはまばゆい星々が輝いているだけで何も無い。

「隙アリ！」

好機とばかりに園田が大きな体を丸めて僕に突進してくる。

「コレぞ、園田家に伝ワリシ伝説の猫だまし奥義！」

なんて言っているけど園田の家って普通のサラリーマンの家系のはずだよな。

「スタークラッシュ！」

「ぐえー！！」

ただの体当たりなのにこんな力があるなんて。やはり星々を味方につけられたのは痛かったか……。

「て、なんでやねん！！」

思わずのってしまったけど、どうしてただの体当たりが園田家に伝わりし秘伝の技（園田本人はそこまで言っていない）

なんだよ。

確かに大きく吹っ飛びはしたけど、それはもともとこいつの馬鹿力のせいだ。しかも攻撃が当たって調子に乗っているのか、二回目をやるうとしている辺りがこいつの馬鹿さを物語っている。

「コレゾ園ダ家ニ伝わりし……以下略！」

せこっ！

技を出すのなら、決め台詞くらいちゃんと覚えよ！しかし、どうみてもただの体当たりだから避けるのになんら苦労はいらない。

「スタークラッシュだか園田クラッシュだか知らないけどさ……」

「！！」

完全に僕のほうに集中していた園田は佐藤さんの気配に気づくのが一瞬遅れる。しかし、その頃には佐藤さんは既に園田の懐の中にいた。

「都子、殺人鬼になりまーす」

はいー！？

園田のスタークラッシュとかいう名前の体当たりもすごいと思っただけで佐藤さんのその台詞も正直どうかと思うんですけど。しかし、佐藤さんのほうが技の腕前は上だった。

懐に入り込み、その場で素早くナイフを動かし相手に回避不能の連続斬りを打ち出す。

早い、早い！

とても常人じゃない瞬発力は彼女が以前悪魔との事件に関わったという話が事実であることを決定付けるいい証拠となった。

「またつまらぬ物を斬ってしまった…」

さらに、はいー！？

決め台詞はパクリですか？

ついでに言うと思い切り腹を突いてたし……。

「どうせ技を出すならこのくらいの決め台詞とインパクトがないからね」

「そ、ソウだつタのか……。さすが、以前悪魔ノ事件に関わった奴は違…がハア！」

園田はそう言って口からに血……の代わりにあらかじめ大量に口に含ませておいた唾液を吐いてその場に倒れた。

何で操られているくせしてそんな縁起ができるんだよ？

「そうそう。そのくらいやらないと」

佐藤さんは楽しそうに微笑んでいる。何だか僕一人だけおいいていかれている感じである。

何はともあれ佐藤さんを救い出せた。

「佐藤さん、大丈夫…」

差し伸べようとした僕の手を佐藤さんは冷たくはたいた。

「気安く触らないでくれる？あたしに近づくなって言ったでしょ？」

「……………」

「じゃあね」

「ま、待つてください!」

「何?」

「僕のことは変態男でもなんでもかまいません。でも、園田だけは変態扱いするのをやめてください!」

「はあ?何それ?」

あれ、何か違う。

僕が言いたいのは園田のことなんかじゃないはずなのに。

佐藤さんも呆れたような顔をしている。

「あんた馬鹿じゃないの?せっかく引き止めたんだからさあ、そこは普通自分のこの間の失態について弁解するところじゃないの?何、自分の友達をかばってんのよ。あたしと深い関わりがあるわけでもなし」

まったくもってそのとおりである。しかし、男子に仁言はなしと
いうように一度口から出てしまった言葉を今更取り消せない。不本
意だけど、ここは園田の弁解をしまくって、何とか場を持たせよう。
「それはそうだけど、このことで君が園田のことを悪いように言っ
てしまったては困るし…」

「はあ?つくづくあんたって馬鹿だよ。脳みそ入ってるの?だから、あたしと園田君は何も関係ないんだからそもそも彼の話しなんかするわけないじゃない。名前ボカしてネタにすらないよ」

佐藤さんは軽蔑したように「それに」と続ける。

「今、あたしが園田君のことを悪いように言われると困るって言ったよね?つまり何、あたしは人の弱みをそこら中にばら撒く口の軽い女だって言いたいわけ?」

「え?そんなんつもりじゃ…」

「つもりじゃなくなたってそう聞こえてんのよあたしには!」
まずい。

いよいよ佐藤さんの声が苛立ち始めた。

駄目だ。今の僕が何か言っと、余計に佐藤さんを逆なでしてしま
う。ど、どうしたらいいんだろう…。

「はいはい、その険悪ムードのお二人さ〜ん」

険悪ムードの……と口になっている割には険悪ムードの意味をわかっていないっぽいんですけど。

この状況によく、割って入ってこれたなこの人……。

「けんかはよくないよ。一緒に踊って陽気になりましょー！」

「…悪いけどそんな気分じゃないから」

「ちよつと取り込んでいます。酔っ払いは少し向こうに…」

「酔っ払い〜？ワタシ、酒なんか飲んでいないよ。夜に飲むのはミズ〜！昼に飲むのはサ〜ケ〜じゃないですか！」

はつきり言います。

その思考は百八十度間違っています。

「そんなのあたしの知ったことじゃない。じゃあね、あんた達に付き合っているほどあたし暇じゃないんで」

佐藤さんは機嫌悪そうにそう言つと、僕とこの変な人に背中を向けた。しかしどうしたことだろう。この変な人が突然僕の視界から消えたではないか！

「お嬢さ〜ん、ワタシから逃げられると思ったたら大間違いヨ？それとも高校でバックダンサーやったのは嘘なのかナ？それともやったのは事実だけどしよぼすぎて語れないのかナ？」

「あんた、どうしてそのことを知っているの？あたしの記憶を知っているってことはまさかあんたも悪魔の…？」

「そうで〜ス！しかし、今はそんなことはどうでもイイ！ワタシは彼方の国から来た物真似パフォーマー。お前達、日本に来てからちようど七十七回目のお客。こんな縁起のいい数字、逃すわけにはいかないヨ？」

「つまり縁起がいいついでにあたし達からしこたまお金を踏んだくらうとわけね？」

「さあ〜？ワタシ、そこまで言っていない。ただ縁起がいいと言っただけヨ」

「物真似パフォーマーだか何だか知らないけど悪魔の手先が相手な

らやってやろうじゃない。あたしだけを馬鹿にするなら蹴りの一発で勘弁してやろうかと思っただけど須磨高を馬鹿にするのだけは許せないからね」

「くつくつく、吠え面かくなヨ〜？」

「それはこっちの台詞だよ」

あのお、憤っているところ悪いんですけどこの先僕はどうすればいいんでしょうか。何かまた二人だけの空気になって僕だけのけ者にされている。これもこれで立派にいじめなんですけど。

「何やってるの羽鳥君！さっさと行くよ！」

「へ？え、どこに……ですか？」

「こんな寂しいストリートで勝負つまらない。ワタシがねぐらにしている場所があるからそこへ行く。そこにはワタシと同業の仲間達もいて楽しいネ！」

「そゆこと。ほら、さっさと歩く！」

「は、はい〜！！」

何だか知らないけど、今の会話の間だけ先週までの僕達の関係が取り戻せたのかな。

Deserted theater

謎の物真似パフォーマーに連れられてやってきたのはどこかの劇場のようなところだった。

当然、表の入り口からは入らずに裏口を通って中へ入る。

「この部屋の中にワタシの仲間イル。この中で勝負ネ」

「オッケー。劇場だからそれなりに衣装もありそうじゃない」

「ハッハッハ、何でもあるヨ」

さつきから物真似パフォーマーと佐藤さんだけが楽しそうに会話をしている。

また僕は置いてけぼりですか……？

佐藤さんと一緒にいらられるだけマシなのかもしれないけど、これはこれで自分の存在が忘れられているようで嫌だ。

そんなことを考えていると、物真似パフォーマーが扉を開けて僕達を中に招待する。

一見、控え室のように見えたこの部屋も実は立派な稽古場のようだ。小さいがちゃんとした舞台がある。

「ヨォー、戻ったヨ」

「アルフレッド、今夜の獲物になったのはその子達かい？」

「そうトモ」

「女の子のほうはリズム感よさそダガ、男の子のほうは何だありや？身のこなしがまるでなっていないじゃない力？」

ええー？

リズム感がないのは頷けるとしても、そこから普段の身のこなしまで文句をつけられるのか。しかも、この人達の言葉は片言の日本語だから悪魔に操られているのかどうかよくわからない。

目つきとか顔つきとかは普通っぽいけど……。

「あんた、酷い言われようだね」

「うう……」

「いいじゃない。これからの勝負であいつら見返してやりなよ」

「そう簡単に言いますけど僕、物真似とかダンスは……」

得意じゃないんですけど。そう言おうとする前に僕達を連れてきた物真似パフォーマー、アルフレッドさんが「チュ〜も〜ク!」と声を張って全員を注目させる。

「今宵もワタシの放浪癖が災いして人を二人も拉致ツてきたネ」

放浪癖って……。それに、今宵もってことは悪魔に操られる前にもこの人はそこらを歩いてきた人達を拉致していたってことか？

(か、軽く犯罪だ……)

「しかも、今日のお客さんはチョ〜豪華!何と、そちらのお嬢さんはかの有名な須磨ヶ岳高校のバックダンサーをやっていた御仁!」

アルフレッドさんの説明に外国人パフォーマー達が歓声を上げる。

「あの、佐藤さん。須磨ヶ岳高校ってそんなに有名な学校なんですか?」

「いや、めっちゃくちゃ普通の公立高校なんだけど……」

外国人の話術、恐るべし。

多分、須磨ヶ岳なんて言葉を聞いたことも無いんだろうなあ。

「そして、コチラの少年ハ弓道をやっていたそうネ!」

「ヘイ、アルフレッド!きゅーどーとは何か?」

「クラスター、それはアーチェリーのことさ」

「オウ、アーチェリーか!俺の息子もアーチェリーのサークルに入っているゾ!」

「腕前はどのくらいなんですか?」

僕はつい外人パフォーマーに尋ねてしまった。

アルフレッドさんはそれを丁寧な言葉で遮ると、説明を続けた。

「こちらの二人にやってもらうのは我々の稽古でハ、オナジミのモノマネだんすネ」

『物真似ダンス!?!』

聞いたことのない単語に僕達の声が思わず揃う。

「ルールは簡単ネ。ワタシ達が踊るダンスを見て、それをマネして

踊ればいい。たったそれだけヨ」

「ほんとにそれだけなの？悪魔に操られているからって後で適当なルールつけ加えたりするんじゃないでしょうね？」

「ものまねばふぉーまー、嘘つかナイ。ワタシはただ純粹に貴方達とモノマネだんすを楽しみたい、ソレダケ」

「ふゝん…。嘘はなさそうね」

「佐藤さん、どうするんですか？」

「面白いから受けてたとうじゃない。元バックダンサーの実力を見せてあげる」

佐藤さんはニカツと笑うと、そのまま軽いステップで壇上に上がった。

「アルフレッド、彼女の相手は誰にするんだ？」

クラスターと呼ばれたパフォーマーがまるで自分を指名して暮れと言わんばかりにわざとらしく言う。

「クラスターでいいヨ。お前、この子達のこと少し侮っているようダ」

「へへへ、よくワカタな。そんじゃあ、一丁やったルゼイ！」

長身のクラスターさんは軽快なジャンプで壇上に上がった。

「お嬢サン、安心してイイよ。まずはウォーミングアップに簡単なのからいくからサ」

クラスターさんは自信満々の笑みを見せると上着を素早く脱ぎ捨てた。

A m i m i c

こいつ、なかなかできる！

あたしはさつきからクラスターさんの踊りを真似するのに精一杯だ。

文字通りモノマネである。

（須磨高スマップバックダンサーズを務めていたこのあたしの動きがかなわないなんて…）

「クラスターは今でこそ道化の道を歩んでいるが、もともとは新体操の選手だったんだよね」

あたし達をこの場に招いた張本人、アルフレッドさんが勝ち誇ったかのようにいやらしく笑っている。

自分の手柄じゃなくせに偉そうにしやがって。

でも、あたしにはわかる。

あの人もそれなりの実力を持っているということが。今のような軽口はもう何度叩かれたかわからないが、それでもあたしがクラスターさんの踊りを真似する時の顔は真剣^{マジ}だった。きっと、クラスターさんのダンスとあたしのダンスを細かく分析しているに違いない。

「イエー！」

「イエー！」

はあ、はあ、はあ…。

な、何とか踊り終えた。

確かにあの事件をきっかけに少しの間、須磨高で新体操部には入っていた。が、所詮その程度のあたしじゃ力量がぜんぜん違いすぎる。

物真似初心者ということもあってか、かなりテンポはゆっくり、キリのいいところで区切りながらのダンスだったのにあたしはバテバテ、クラスターさんは全然余裕の表情なんだもの。

「ミヤさん、なかなか筋がイイ。後はもう少し体力ほしトコだネ」

しかもあたしはなぜか呼び方が『ミヤさん』になってるし。

あたしや、どこかの寺か天皇の名前か何か？

「まあ、及第点はあげられるネ」

アルフレッドさんは乾いた拍手をしながらニツと白い歯を見せて笑う。

あたしにもう一曲分踊れるだけの体力があれば、絶対こいつと対決したのに！

「さて、次はケン君の番だネ」

アルフレッドさんはそう言って羽鳥君を……じゃなくて変体男のほうに顔を向ける。

「ケン君のバトルの相手はこのワタシネ。ケン君はモノマネもダンスも初ということから点数はかなり多めにみるネ」

アルフレッドさんは「その代わり」と指を振りながら続ける。

「最後のフィニッシュだけはケン君がその弓矢を使ってかつこよく決めてほしネ」

「はあ！？何ですかそれー！！」

変態男が悲鳴にも似た叫び声をあげる。

あたしも今の一言は思わず耳を失った。

ダンスをやったこともない人間にダンスのフィニッシュを即興で考えろだなんて。

それもあんな大きな、ダンスには絶対必要なものを使って。

「さ、佐藤さん、助けてください……」

変態男がよろよろと倒れこむ。

「でえーい、近寄るなあ！」

あたしは反射的に変態男の顔に手を当てた。

「と、とにかく最後にその弓を使って終わればいいのよ。天井に弓を打って穴でも開けちゃいなさい。テールズだったか忘れたけど確かそんな技があったでしょ？」

「パクリは著作権の侵害ですって……」

「うるさーい！とにかくあたしから離れてって言っているでしょ！」

「うう、そんなこと言われても…」

変態男は困惑した表情のままステージを見つめる。

既にステージ上ではアルフレッドさんがスタンバっている。

「とにかく、多めに見てくれるって言うんだからとりあえずはあの人の動きに集中すること。弓道の基本なんでしょ？ 集中力は？」

あたしはだいぶ前にこいつが言っていたことを真似て言う。

「佐藤さん、あの時の言葉を覚えて…？」

「ヘイ、ケン君！ ダンスの準備が整ったなら早くすてージに上がってきなさい！ さもないと時間切れで強制的に負けにスルよー！？」

「ほら、ああ言ってるよ」

あたしは変態男の背中をポンと軽く押した。

変態男は頼りなくステージに上がっていく。

「Let's Dancing!!」

アルフレッドさんの掛け声で曲が流れ始める。

大丈夫、あたしのに比べたらはるかにテンポの遅い曲だ。

これなら、いける。

それでもたまにアルフレッドさんのリズムについていけないことがあったが、それでも何とかダンスを踊りこなせている。

見た目は盆踊りみたいだけど…。

そして、最後にフィニッシュに入る。

ここが運命の別れの時。

あいつのフィニッシュで全てが決まる。

G o r g e o u s p a r t y

何とか、ここまで踊れた。

アルフレッドさんが踊るのを見ながら何とかやってきたけど、それなりに間違えず踊れている自信はあった。

ギャラリー達から見てどうなのかはともかくとして。

そして、ついに迎えたフィニッシュ。

最後は軽いステップを踏んで終わりなのだが、僕の場合はそうじゃない。曲で言えば最後のジャン！に当たる部分を即興で考えて最後を飾らないといけないのだ。

でも……。

（アルフレッドさんのダンスを覚えるのに必死で考える暇なんて全然なかったんですけど……）

結局、僕の頭に残っているのは佐藤さんの○イル○の弓矢専用技で決めてしまえというその会話だけだった。しかし、あれはゲームの話だから真上に打つだけでインパクトがあるわけで、現実世界では弓矢を真上に射ただけで爆発などしない。（あれは本来、地面に接したときに爆発する技だったはずだが……）放たれた矢が天井の硬さに負けて落ちてくるだけだ。

（でも、でも何もしないよりはずっと得点は高くなるよね？）
そうだ。

何事もまずトライだ。

これで及第点に達しなかったら……。

ええい、とにかくやってやる！

僕は背中に背負った弓矢を両手に持つと、そのまま客席の天井目がけて射る。

「フアイヤー！！」

なぜだか知らないけど声も出た。
声だけ聞くと相当かっこいいし、決まった感じがする。

これで悔いはない。

そう思つて天井に飛んでいく矢を目視で追いかける。そして、天井に当たつて情けない音が……。

ドゴアーン！！！！

それは見事に計算された爆発だった。

『……………』

いや、正確には爆発音だったのだが。しかし、そのおかげで天井から落ちてきた矢が地面に落ちる情けない音もカットされた。

「羽鳥君、ポーズだよ！ポーズを取つて！！」

佐藤さんが客席から叫ぶ。

ハツと我に返つた僕は衝撃の出来事ですっかり緩みきつた顔を引き締め、弓矢を構え適当なポーズを決めてみる。

「オウ、素晴らしいぜ！」

クラスターさんが大きな拍手を僕に送る。それに続くように他のパフォーマー達も「ブラボー」と声をかけ、盛大な拍手を送る。

「ケン君……」

隣に立っていたアルフレッドさんが厳しい表情で僕を見る。

ああ、この人を唸らせるには至らなかったか。

そう思つてがつくりと肩を落とすと、アルフレッドさんはそんな僕の肩をがしつと掴んだ。

「見事ダ。たったあれだけの短い打ち合わせでここまでやってのけるなんて……正直ワタシの予想をはるかに上回っていましたタ」

「は？」

僕の頭の中が一瞬フリーズした。

この人は今、僕を褒めてくれた……？

「文句なしに君も合格だヨー！」

アルフレッドさんが「YEAH！」と右腕を振り上げる。

稽古場は、いや、ダンス会場はアルフレッドさんの歓喜の雄叫びに弾かれたように大賑わいを見せた。

「やったじゃん！勝ったよ！あたし達勝ったんだよ！」

佐藤さんもおおはしゃぎで僕の手を取ると、上下に何度も振った。

「わぁ！ちよ、ちよっと結構痛いんですけど！？」

「気にしないの！ほら、あたしらもステージに上がるよ！」

皆、すっかり喜びと楽しみに酔いしれているのか、もはや勝負のことは忘れてステージの上で踊りまくった。

僕もちろん踊った。（というか踊らされた？）

それに、今この一時だけかもしれないけど、佐藤さんとの仲は完全に回復していた。

その気を逃すほど、僕は鈍感な人間じゃなかった。

結局、一時間ほどひたすら踊った後、僕達は物真似パフォーマー達に別れを告げ、劇場を後にした。

後で気づいたことだが、もう夜は完全に更けている。

こんなに騒いで近隣の人に文句を言われないのだろうか。しかし、今更こんなことを思うのも気分を壊すだけなのでやめておいた。

「楽しかったねえ」

もはや佐藤さんはすっかり以前までのように僕に話しかけてくれる。

「ええ」

僕も楽しそうに頷く。

あのことを謝ろうと思えばできたが、それはしなかった。

無理に思い出させて、せっかく治った仲を再びこじれさせることもないと思ったからだ。

「前にもこんな思いになったことがあったなあ」

「それって、須磨高バックダンサーの時の？」

佐藤さんは小さく頷く。

「あの時も、向井君とみのりんの二人と踊り終わった後にこんな気

持ちになった。すつごく温かくて、皆と心が触れ合った感じがしたんだ……」

佐藤さんはしみじみと語る。

「じゃあ、僕とは心が触れ合え……」

ましたか？そう聞こうとして、またも邪魔が入ってきた。

「はうう、お二人ともまつたりしすぎですよ……」

「わっ！？」

「妙ちゃん！？」

電柱の影から現れたのは新たな刺客……じゃなくて、僕たちもよく知る伊東妙さんだった。

「私達がどのくらい、劇場の前でお二人を待っていたと思うんですか……？」

伊東さんはぷうぷうと頬を膨らませて僕達を可愛らしく睨みつける。

声と表情だけではちっとも怖くないのだが、少なくとも声の感じから彼女がだいぶ僕たちを待ち続けていたのは間違いないようだ。

「さっきのアレは、伊東さんがやってくれたんだね？」

「はい」。アーミルさんが聞き耳を立ててくれたおかげですよ」

伊東さんはにつこりと微笑む。が、聞き耳を立てていたのなら、正直助けるよと言いたい。

「久しぶりだね。一週間ぶりくらいかな？」

「そのくらいですかねえ。それより、お二人とも仲直りはされたみたいですね」

伊東さんは一人でよかったなどと微笑んでいるが……。

僕は横目で佐藤さんを見る。

しかし、佐藤さんはその話題には触れずに「また何かあったの？」と尋ねる。

「まあ、妙ちゃんがあたし達の前に出てくる時はたいい何か厄介ごとを持つてくるときだろうけど」

「うう、否定できないだけに悔しいです……」

どうやらその通りらしい。

はあ、せっかくいいムードになりかけていたのに…。

「今度は何が起こったの？」

僕が尋ねると、伊東さんはまだため息をつきながらアーミルさんと分離する。

「操られた人間達の活動が前よりも盛んになってきているんですよ。数も、ここ一週間でかなり増加している」

「でも、それは佐藤さんが昼夜逆転の生活することで防がれているのではなかったんじゃないですか？」

「そのはずなんですけど……」

アーミルさんの視線が佐藤さんに向けられる。

「しょ、しょーがないでしょ！人間なんだから、実践不可能な時だってあるつての！」

「とにかくそう言うわけです」

アーミルさんがため息をつきながら言う。

「私と妙さんは今夜にでも悪魔を殲滅したいと思ってこうして出てきたんです」

「おかげであたしがお母さんを説得するためにどれだけ苦労したか……」

伊東さんが半泣きになりながらため息をつく。

アーミルさんはそれに、気まずそうに咳払いをするだけだった。

「でもアーミルさんは、佐藤さんから悪魔を祓う方法を知らないんでしょう？それだったら、今ここで操られた人達を倒しても無意味なんじゃないですか？」

「う……む。た、確かに操られた人間達は我々以外には戦意を示しませんから基本的には無害です」

「じゃあ、結局のところは操られた人達の血を多く見るだけじゃない」

「しかし、前にも言ったでしょう！こうして話をしている間にも貴方の精神^{なか}にいる悪魔が喰らった人間達の魂は消滅していくのですよ

！」

『！！！！』

そうだ。

佐藤さんの中には悪魔に囚われた人達の魂がある。僕達はその人達を助けるということも忘れてはならない。

「とにかく、悪魔の出方を待つしかないのですが、こうして下僕にした者達を救っていけば悪魔も業を煮やして出てくると思うのです」

「そ、そんなものかなあ……」

日本の本に載っている悪魔ってとてもそんな単純な性格ではなかったと思うんだけどなあ。

もちろん、天使もだけど。

「ああ、もう！わかったってば！」

佐藤さんがうんざりだと言わんばかりにお手上げをする。

「あたしが動けばいいんでしょ？悪魔の宿主であるあたしが動けば少しはあいつも動きを見せるかもしれない。そういうことでしょ？」

「え、ええ、その通りです……」

アーミルさんはあまりにも簡潔な回答に半ば呆れた表情で頷く。

「じゃあ、さつさと行こうよ。夏休みなのに、こんな生活ありえないもん」

佐藤さんはそう言うのと、僕達を置いてさつさと歩いていってしまった。

「あんなんで、本当に大丈夫なのかな……」

「ええ、不安です……」

アーミルさんも不安げに佐藤さんの背中を見送っている。

「ところで、あのお」

伊東さんがおずおずと手をあげる。

「羽鳥君は、佐藤さんと仲直りできたんですか？」

「それが、何だかうやむやになってしまっ……」

「そうなんですか？見た感じではごく普通に接していたようですけど？」

「それは多分、さっきまで外国の芸人達と踊っていたから気分が良かっただけです。まだ僕のことを許してくれているかどうかは…」

…」

「そう、なんですか…」

伊東さんは不満そうにつぶやく。

「羽鳥君、早く佐藤さんに謝ってあげてくださいね。きっと、佐藤さんも羽鳥君の謝罪の言葉を待っていると思います」

「そうでしょうか…」

男の僕にはとてもそうは見えなかった。

伊東さんは同じ女の子だから、こういうことは多少わかるのかもしれない。所謂女の勘というやつだろうな。

「わかったよ伊東さん。頑張ってみます」

僕の言葉に伊東さんは小さくだが、しっかりと頷いた。

「羽鳥くん、何やってるの！？早く行くよー！」

遠くで佐藤さんが叫んでいる。

「では、また会いましょう」

アーミルさんも伊東さんと合体してそのまま屋根伝いに飛び去っていった。

F u n k y d r i v e

伊東さん達と別れ、僕達は劇場からさっきアルフレッドさんに連れてきてもらった時とは反対方向に進んだ。

この辺りは僕もあまり来たことはないのだが、この先に向かうと確か駅があったはずなので、帰りはそこから電車に乗って帰れば楽ができるというわけだ。

僕たちの間に会話は無い。

やっぱり、さっきのは一時的なものだったのか……と思うとそうでもない。今は黙々と歩いているだけだが、時折会話は交わしていた。

あまりに何気ない会話すぎて何を話したのかは覚えていない。でも、僕も佐藤さんも一週間前のことについては話そうとはしなかった。

「それにしても……」

佐藤さんがまた重い口を開いた。

「こうやって歩いているだけで敵が出てくるとはそうそう思えないんだよねえ」

そりゃあまあ、そうだろうな。

「ちよつと、気がついてたのなら言いなさいよ！」

「だ、だって佐藤さんが自信たつぷりに歩いていくから僕も何かあると思っただんだもの！」

「あてなんかあるわけじゃないじゃんか！」

「威張って言うのはどうかと思うけど……」

「うるさいうるさい！羽鳥君も男なら何とかしなさいよ！」

「何でそうなるんだよ！？」

「困っている女の子がいたら男の子が助けるものでしょ！」

「そ、そんなこと言われてもこればかりは……」

どうしようもない、そう言おうとした僕の目線にあるものが入っ

てきた。

「バイク…？」

僕の目線の先、大きな公園の入り口にポツンと置かれている一台のバイクが無性に気になった。

「これで探したら早いかな？」

先が見えない仕事だが、自分の足で探すよりかは効率がよさそう
だ。

「と思うんだけど、どうかな？」

「いいんじゃない？ただ、羽鳥君はバイクの免許を持ってなさそう
に見えるのはあたしだけかな？」

「うっ…」

確かに僕はバイクの免許を持っていない。

年齢的にはバイクの免許は取れるのだが、危ない乗り物ゆえに乗
るうとも思わない。

「まあ、いいか」

佐藤さんの追及がくるかと身構えていたが、彼女は僕の予想とは
逆に軽く受け流した。

そして、バイクに近寄りメーターの辺りをまじまじと見回してい
る。

「キーもついているみたいだし。この時間で車も少ないだろうから
無免でもばれないよ」

そういう問題ではない気がする。でもまあ、今の僕は事情が事
情だから警察に追いかけてられても悪魔がとりついていたらとか理由を
つけて倒すこともできる。それはそれで罪悪感があるけど……。

「で、どうするの？本当にこのバイクを失敬してドライブに出るつ
もり？」

一応聞いてはいるものの、佐藤さんのほうは既にバイクにまたが
ってエンジンかける姿勢に入っている。

「……………」

「……なに？」

「…佐藤さんが運転するの？」

「そうだけど？」

何か問題ある、とても言いたげな顔だ。こういうときにあまり逆らいたくはないのだが…。

「佐藤さん、バイクの免許は…？」

「そんなものないよ」

「やっぱり……」。

「だーいじょうぶだって。ゲーセンのバイクと一緒にだってこんなもの」

いや、だいぶ違う気がするんですけど。

それに、女の子が運転するバイクに男が乗るなんて、なんかかっこ悪い。しかし、そう言っただいてくれる彼女じゃないこともよく知っている。

僕は仕方なく、彼女の後ろに座った。

「しっかり捕まっというてね。初めてだからどんな運転するかかわからないし」

ああ、頼むから発進する前にそんなことは言わないでほしい。

「いつくよお！」

佐藤さんはアクセルをふかし、クラッチを踏むバイクをゆつくりと動かす。

「なあんだ。やっぱりゲーセンのと変わんないじゃん。足の操作が面倒だけど」

そう言っただけの佐藤さんの順応力の高さはやはり恐るべし……。

そのままバイクで夜のドライブに出かけることになった僕達。

現在の時刻は既に翌日の0時。歩道から車道に出ても人口密度（自動車密度？）はそれほど変わらなかった。

佐藤さんはアクセルを回し、スピードを上げていく。

「しっかり捕まっついてよ。もっとスピード上げるからね」
たぶん、こんなことを言っていたのだろうがヘルメットをかぶっているのと風のせいではほとんど何を言っているのかわからない。
捕まっついていてという言葉だけは聞こえたので、スピードを上げるのだろーと思ひ、佐藤さんの腰に掴む力を少しだけ強めた。
間違っっても胸はさわっていいない。
それはそれでシチュエーション的に残念ではあるが……。

それにしても、この人には警戒心というものが無いのだろうか。
この間、僕のせいであんな目にあつたというのに、バイクだなんて。（しかも、自分が運転する側になるなんて）
僕は佐藤さんの背中をぼんやりと見つめながらそんなことを考える。
けっして、背が高いほうではない彼女の背中だが、こうして腰まわりに手をやるとけっこう大きく感じる。

けっして、太っているなんて言っていないのでそこは誤解をしないように。

「!？」

なんだか辺りが騒がしくなってきた。
といつても今は真夜中。

いきなり街が活気付くはずなんてありえない。

ヴォンオーン！

静かな真夜中に響くアクセルの音。

ああ、せつかく佐藤さんとドライブをしているというのに、どう

してこんな目に遭うんだろう。

僕は自分の不運さをとことん呪った。

出会ったのが不良だけに今年の夏はふりよう（不調）だ…なんちやって。

「羽鳥君、スピード上げるよ！」

佐藤さんがアクセルを思い切りひねる。

もしかして今の駄洒落、聞いていたのかな？

僕のそんな考えをよそに、佐藤さんは怖いほど真剣な表情でバイクを走らせる。

「へいへーい、そのカノジョー！」

「男を乗せて闇夜のドライブとは粹だよなあ！」

不良達がそんなことを叫ぶのが聞こえる。

「そんなもやしみたいな男なんて放り捨てて、俺達の愛車に來いよ？サービスしてやるぜ？」

く、くそ！

お前らみたいな奴が佐藤さんにナンパなんて百年早いんだよ！

「それもいいかもね」

ゴーン！！

佐藤さん、貴方ってそんな人だったんですかぁー！？

「だけど、それはお断り。今からあたしはこいつとやることがあるからさ」

断ってくれたことにはホツとしたが、『コイツ』扱いですか…。

「そんな連れないこというなよぉ」

不良グループの一人がバイクを寄せて、佐東さんの腕を掴もうとする。

（この野郎！）

僕はいつものように弓を構えて一瞬、佐東さんの腰に回している手の力を緩めた。

刹那、僕の体が一瞬フワリと浮いたように感じた。

「うわわ！」

僕は急いで佐東さんの腰に再び手を回した。

「……………」

つもりだったのだけど。

（…こんなに柔らかかったっけ？）

いや、そんなはずはない。それに、僕が回していた手は腰よりも数段高い位置にある。

これには手を伸ばそうとしていた不良も呆れてものが言えなくなっている。

「ば……………」

「……………」

僕の全身に嫌な汗が流れる。

「馬鹿か貴様はあ！！」

さすがに運転する手を離すわけに行かないのか、そのままの状態
で佐東さんの肘鉄を食らった。

「わあ、いたた！落ちるってー！」

「いつそ落ちろ！そして死ねえ！！」

「そ、そんなわざとじゃないのに…」

「故意だったらなお悪い！」

僕たちがそんなやり取りをしていると、不良達はさすがに自分たちが無視されていることに気づいたのかドスの聞いた声で「無視するんじゃねえ」と佐東さんの腕を掴もうとする。

「チイ！」

佐藤さんは鋭い見交わしで、バイクごと不良たちの魔の手を避
す。

「こうなったら意地だ！全員であの女を捕まえろー！」

ああ、どうしてこんなことに。

と、とにかく今は佐藤さんの運転にすべてをかけるしかない。

Desperate choice

「なかなかしつこいなあ、あいつら」

佐藤さんは夜の連続カーブを巧みなハンドルさばきでほとんど減速せずに曲がりきる。バイクはカーブを曲がりたりするときは銃身をその方向に傾けないといけなないので僕も当然体を傾けないといけないのだが――

（地面スレスレじゃないかあ！）

僕は半泣き状態だった。

佐藤さんは運転に必死でそれは見られずに済んだことが唯一の幸いだろう。そして、僕たちの背中の後ろでは不良達が何かをわめきながら追いかけてくる。

どのくらいのスピードで走っているのかはわからないけど、この調子で行くと隣町への峠越えになってしまい――

「……」

僕は考えるのを中止した。

「しぶといのが一匹……」

僕は何とか取り出した矢を相手のタイヤ目掛けて投げる。

不幸なことにバイクのスピードによる逆風で投げられる距離はかなり縮まるが、それでも距離的に広くなかったので矢は狙い通りではなかったが、相手のバイクのタイヤに刺さる。

練習用なので普通の矢のように先端が尖ってはいないが、多少荒削りなのものは少しだけ先端が尖っている。

人を倒すには不十分な鋭利具合だが、タイヤをパンクさせるのに十分だった。

「な、なんだこれは……！」

「てめえ、やりやがったな！」

先頭がバランスを崩し、転倒する。

後続も次々と連鎖して転倒していく。

「やるじゃん、変態男！よおーっし、この調子で一氣に逃げ切るよ」
佐藤さんは再びアクセルをふかす。

彼女が喜んでくれたのは嬉しいが――

（今、一瞬だけ変態男が復活してしまった…）

僕の心には複雑な気持ちが残った。

不良達の過半数は僕の矢による転倒で戦線離脱いったが、それでもしぶとく生き残ってきた者もいる。

僕の矢を警戒してか、今度は先ほどのように不用意には近づいてこない。

「このままじゃ、まずいねえ」

佐藤さんがつぶやく。

峠は既に下り坂。

これを下れば、隣町に入る。

このまま町を越えてまでレースをする気はこっちには毛頭ない。

「どこか路地みたいなところがあればなあ…」

佐藤さんはもっともなことをつぶやくが、走っている場所は山中腹辺り。路地の代わりにあるのは深い崖だ。

まさかこの崖に落ちてみるわけにもいくまい。

「ねえ、いつそのこと落ちてみようか」

「なっ!？」

佐藤さんがとんでもないことを提案する。

「わかってているのか!? 落ちたら確実に死ぬんだよ!？」

「大丈夫だって。さっき、カーブを曲がるときに見えたんだけど、崖の下、小さいけど川があるでしょ？」

佐藤さんに言われ、僕は再び訪れたカーブのときにそれを確認する。

速いスピードだったし、暗いため見えたのは一瞬だが、水のようなものがゆらめいているのはわかった。

「いいアイディアでしょ？」

「うう、今この状況を打破するにはこれしかないんだよね…」

「男なんだからビシッと覚悟きめなよ！」

「は、はい！」

佐藤さんの叱咤を受けて、少しビビッてしまった僕。

女の子に言われたくらいでなんだと思うかもしれないが、そのくらい説得力のある一言だったのだ。

もうそろそろ峠も終わりという頃、ついに勝負のときが来た。ガイドレールが途切れたところから一気に大ジャンプ！

そして、僕達は一瞬鳥になり……そのまますぐ下の小さな川にバイクごと落っこちた。

「うええ、ゲホゲホ！」

「ゼエゼエ、佐藤さん……大丈夫？」

先に川岸に上がった僕は佐藤さんに手を差し延べる。

「ありがと……」

佐藤さんは僕の手をしつかりと掴む。

「あのバイクの持ち主には悪いことしちゃったなあ……」

珍しく佐藤さんが申し訳なさそうな顔をしている。

傍若無人なところばかりかと思っただらそつでもないんだなあ。

「クシユン！」

佐藤さんが可愛らしくしゃみをする。

流石に夏場とはいえ、夜の川の水はそれなりに冷たい。

僕は学生服のままだったのでズボンのポケットの中にはハンカチが入っていたのだが、それも見事にズボンごと濡れてしまっている。

僕は佐藤さんに背を向けて、それを力いっぱい絞ってからほんの少し風に当てて乾かす。

「はい、これ使って」

僕はそつと固く絞られたハンカチを渡す。

こんなものでは何の意味もないことはわかっていた。

佐藤さんもツツコミを入れてくるかと思っていたのだが、その意に反して彼女は僕からハンカチを受け取ると小さな声で「ありがと」と言っただけだった。

（やけに素直だな…）

そう思いつつ、僕はハンカチで服の水を染み込ませている佐藤さんから目を背けた。

しばらく、互いに無言が続く。

何を話せばいいのかわからない。

何から話せばいいのかわからない。

以前までのように気軽に接することができない。

とてももどかしい。

ずぶ濡れのままの僕の体は少しずつだけ冷えてきている。

そんな僕の肩にそつと何かが置かれた。

ハンカチを持った佐藤さんの右手。

「ほら、返すよハンカチ」

「え？もう、いいのかい？」

僕はハンカチを受け取らずに聞く。

「あんた、さつきから震えてたでしょ？ちゃあ〜んと見えてたんだからね」

何とかつこ悪いことだろう。

せつかく上手く決めることができたと思ったのに。

間の悪いところを見られたなあ。

「女の子にかつこつけるなんて百年早いよ、この変態男…」

佐藤さんは僕の背中に額を押し付けながらつぶやく。

「それでも、かつこつけたがるのが男つてもんだよ」

僕はあくまで強気に笑いながら言った。

佐藤さんは「馬鹿じゃないの」と嘲笑していたが、その目は決して笑っていないかった。

「あ、あの…」

なぜだかわからない。

ただ、『今なら言える』と思った。

「この間は……ごめんなさい」

無駄な抵抗と思われるかもしれない。

それでもいい。

でも、願うことなら――

「別に、もういいよ……」

佐藤さんは背中額を押し付けたまま、小さく言った。

「羽鳥君のことは正直軽蔑してるよ。だけど、君のその無駄に優しいところは嫌いじゃないよ……」

「え？それって……」

ドン！

そんな音が後ろから聞こえた刹那、背中に例えようない激痛が走った。

ああ、なるほど。

結局はこういうオチなわけだ……。

（そつだよな。あんなことをした僕が簡単に許されるわけがないんだよ。なのに……）

甘いなあ、僕は。

あま、い……なあ。

A w a k e n i n g

前のめりの姿勢から倒れた僕は、一瞬だけ佐藤さんの表情を見た。背筋が凍るような不気味な笑み。

三日月を横にしたような唇からはクスクスと笑いが漏れている。

「人間というのは愚かだねえ、羽鳥君。さっきまで君の事を散々嫌っていた彼女が急に君になびくわけがないだろう？」

声は佐藤さんのもののなのに、その中身は彼女じゃない。

いくら彼女が僕のことを嫌っているからと言ってそんなことは決して言わないはずだ。

「くつくつく、この娘の体に入っただのは正解だったな。あの時、同胞を倒した者の仲間だったとはなあ。しかも、操られていた時の名残があるのかこの娘の身体能力は実に素晴らしい」

悪魔は肩を震わせて笑っている。

「いったい、何がこいつはそんなにおかしいんだ？」

「何がおかしいのか、という顔をしているな。下等な人間にわかるはずもなかるうが教えてやろう。私が彼女の気づかないところで下僕を増やしていたにもかかわらず、その下僕達と貴様らを戦わせた理由を」

悪魔は笑いながら続ける。

「単純に、娘の力を計るという目的もあった。しかし、それ以上にこの娘の身体能力をもっと引き出すための経験を与えたというわけだ。より強くなったらこの体を離れ、呪いをかける。呪いと言っても、前例のような人間を操るだけのものではない。呪いをかけられても、その人間は今までとなんら変わらぬ生活を送ることができる。しかし、そこにこの呪いの意味があるのだ。この呪いは悪魔にしかわからぬ香をもち、人間達は知らず知らずのうちにその香を嗅ぐ。ところでこの呪いの効果だが、先ほども言ったように最初は今までとなんら変わらぬ生活を送れる。しかし、ある時を境に呪いは突然

発動する。人間共の憎悪を増し、殺戮・虐殺を繰り返す。一月もすれば地球は死の星となるだろう」

「……」

「憎悪こそ我ら悪魔の好物。憎悪が最頂点に満たしたところで、今度は天上界へと攻め入るのだ」

な、なんて話だ。

とても凡人の僕にはついていけない。だけど、だけど、こいつが僕達の住む世界をめちゃくちやにしようとしていることだけはわかる。

「なるほど、全ての人間をまずは手駒にする作戦というわけですか」
夜空から聞こえたあの声。

伊東さんを乗せて、飛んできた天使のアーミルさんだった。

「ようやく見つけましたよ、悪魔！」

「悪魔なんて呼称はよしてくれよ。私にはちゃんとした名前があるんでね。まあ、天使の貴様や人間にはとても発音できない名前だな。そうだな、借りの名としてシャドウとでも名乗るとしよう」

「シャドウ……！」

「羽鳥君！しっかりとしてください！」

伊東さんが僕に駆け寄る。

「彼に何をした？」

「別に？ちよつとした波動系呪文を食らわせたまでさ」

波動系……呪文？

ファンタジーかよ、てツツコミを入れたいけど、天使と悪魔が現実存在する時点で既にファンタジーなんだよな。

アーミルさんは僕達にわからないような単語を紡ぐ。

するとどうしたことだろうか。さっきまでひどい激痛が走っていた僕の背中から痛みが消えた。

「健一君、立てますか？」

アーミルさんがシャドウを睨みつけながら、横目で僕に尋ねる。僕はゆっくりと立ち上がることでアーミルさんの質問に答える。

「グ……ガ、が……きさ……ウぬ、ウ……」
何だ？

シャドウの様子がおかしい。

「どうやら、まだ完全に体に乗っ取られたというわけではないみたいですね」

アーミルさんが冷静に解説する。

「叩くなら今しかない！二人とも準備はいいですか？」

「はい、準備万全です！」

そう言ってガッツポーズを見せる伊東さんに対して、僕はただ――
「健一君？」

「……ここで佐藤さんを倒したら、彼女は救われるんですよね？」

僕の質問に何らかの意味を感じ取ったのか、アーミルさんは少し間をおいてから「その通りです」とつぶやいた。

「なら……最初から全力でいきます！」

佐藤さんを倒すことに最後の迷いを吹っ切った僕は、背中の弓を構えた。

「作戦は決まったかな？」

僕達の前にはさきほどの苦しそうな様子がすっかり消えたシャドウが立っていた。

「念のために言っておく。今、立ち去れば君の命は少なくともしばらくは取らない。その天使が憑依した（はいった）娘は論外だな」

「立ち去る気なんて毛頭ないさ！僕が、佐藤さんからお前を追い出してやる！」

「やれやれ、穏便には済ませられなかったか。なら、君にも悪魔の恐怖をじっくり味合わせてやろう！」

シャドウの体からは人間の僕にでもわかるくらい異質なオーラを発していた。

Moonlight flower

今やすっかり悪魔化してしまった佐藤さん。

僕達の制止なんて聞いてくれそうもない。だが、先程アーミルさんが言っていたように、佐東さんの体はまだ完全には乗っ取られていない。

佐藤さんはきつと、精神しんしんの中で悪魔と戦っているんだ。

僕達が、僕達も一緒に戦うよ。

だから、頑張つて！

「いきまーす！！」

アーミルさんが憑依した伊東さんが大剣を振り上げながら突進する。

剣の先が白く輝いている。

あれは確か、伊東さんが佐藤さんに最初に出してきた技だ。

「ふむ、あの時より強い力を感じるな…」

しかし、シャドウは臆することなく立っている。

「一撃で無に還す！」

伊東さんの精神なかからアーミルさんが叫ぶ。

「妙さん！」

「はい！」

二人の意識が完全にシンクロした。

『バスターディア！』

真夜中の川を向こう岸まで照らすほどの輝かしい光の剣がシャドウに向けて振り下ろされる。しかし、シャドウはあくまで避ける姿勢を見せない。

完全にあれを受ける覚悟だ。

「やああああ！」

カッ！！

妙さんとシャドウが激突した刹那、目を開けていられないほどの

光量が周囲に降り注いだ。

僕も、耐えきれず眼を伏せた。

やがて、光が弱くなり辺りが再びもとの暗闇に戻っていく。

（二人はどうなったんだ！？）

僕は、まだ元の明るさに慣れぬ目で二人が激突した場所に目をやった。

二人が激突したところはまだぼんやりと光輝いていたが、それもわずかな時間でもとの暗闇に戻っていった。

「……そんなものか？」

「！？」

まるで地獄から響くような低い声に僕は耳を疑った。そして、それは伊東さん達も同じだろう。

シャドウは右手で大剣を軽々受け止めていた。

「やはり、人間なんぞに憑依した天使なぞ取るに足りない存在だな」

「そ、そんな……」

「地獄に堕ちろ……」

シャドウは佐藤さんが戦闘時に使っていたナイフを右手で握る。

「とくと見よ……。我が暗黒魔闘の恐ろしさ……」

「伊東さん、逃げろー！！」

僕は悲鳴に近い声で叫んだ。

あいつのあの構えは、何かとんでもなく嫌な予感がする。

伊東さんは逃げられなかった。

シャドウは人間の僕には見えない速度で伊東さんとの間合いを詰めると、その速度のままナイフで彼女を連続で斬り続ける。

伊東さんの体から血が水しぶきのように飛ぶ。

悲鳴をあげることさえ、許されぬまま伊東さんは静かに川原に倒れた。

「……………」

僕にはまるで見えなかった。

シャドウは、気がついたら伊東さんと間合いを詰めていて、いつ

「まあ、射てしまつて困るのは私ではないのだがな」

(え?)

ズド!

ついに僕の射た矢がシャドウの胸に突き刺さつた。

うん、シャドウの胸に…?

シャドウの胸…?

シャドウは誰だ?

佐藤さんだ。

その佐藤さんの胸は――

「ようやく落ち着いてくれたかな?」

「……あ……」

僕はいつたい何をしていたんだ?

辺りには、僕が作つた手製の矢…?

正面にはその矢で胸を射抜かれた佐藤さん?

佐藤さん!?

顔から血の気が引いていくのがわかつた。

僕の手製の矢は先端がそんなに鋭くない。

当たつたからと言って死ぬには至らない。至らないのだが、佐藤

さんの胸からはトロトロと血が流れている。

「人間の怒りとは恐ろしいものだ。このようなおもちゃが人を殺すための武器に変わってしまうとは…」

そんな……。

何を言っているんだ。

怒りくらいで、あんなおもちゃが凶器になるものか。しかし、しかしそれじゃあシャドウの、佐藤さんの胸からトロトロと流れているあの赤い液体は何だ?

紛れもなく血ではないか!

「ククク、もう終わりかね?」

シャドウは胸から矢を引き抜くと、僕の近くに投げた。ポテン、と情けない音がして矢が僕の足元に落ちる。

僕も、そのままガクリと川原に膝をついた。

「小さな穴とはいえ、大量の血が流れたな。人間はその体に流れる血の幾分かが体外へ流れると死ぬと言うが、そうなつては私もたまらないからな。せめてもの情けで二人まとめて一片も残らず消し飛ばしてやろう」

シャドウはそう言うと、何やら僕たちにはわからないような言葉を紡ぎ始めた。

「醒めぬ夢に堕ちるがいい……！」

シャドウの体から放たれた光は瞬く間に川原を白一色に包み込んだ。

危険だということはわかっていたが、僕にはもう逃げるほどの体力は残っていないし、伊東さんもまだ目を覚まさない。

「ラストリアル……！」

（ああ、僕達はここで死ぬんだ……）

佐藤さんを救えぬまま、あの世でシャドウによつて滅ぼされた地球を見なくてはならないんだ。

こんな情けない結末で終わるなんて、やっぱり僕はかつこ悪いなあ。

「……………あれ？」

いつまで経つても死んだとは思えないくらい体が重い。

さっきよりかは軽い気はするのだが――

「間一髪でしたね……」

まただ。

またかよ。

どうしてあんたはいつもこっちがピンチにならないと出てこないんだよ。

「アーミルさん！」

僕の大声に気負されたのか、アーミルさんは言った後で小さくすいませんと僕に謝った。

そう。

あの波動が放たれた瞬間、アーミルさんは伊東さんから分離して僕と気絶した伊東さんを抱えて上空に逃げたのだ。

「まったく、人がどんな気でいたかも知らずに……」

「すみませんすみません。ほんと、私も人間だったらこんな忍びない助け方をしなくてすんだのですけど……」

必死に人間に謝る天使。

何だか変な構図だな。

何はともあれ、地上に降りた僕達は周囲の状況を確認すると同時に車道を探した。

おそらく奴は、あの一撃で僕達は完全に死んだものと思っているに違いない。

「それにしても、この川原の惨状はいつたい……」

「これが悪魔の力ですよ。それでもまだ奴のほんの一部に過ぎません」

アーミルさんが険悪な表情で言う。

「それにしても都子さんはいつたいどこに……」

「うわぁー!!」

「!?!」

「佐藤さんの声だ!」

僕は彼女の声が聞こえたほうに向かって走った。

「健一君、あそこです!」

アーミルさんが空から叫ぶ。

佐藤さんは、ついさっきまで川が流れていた大穴の下にいた。

「佐藤さん!」

僕は慎重に穴の底へと降りる。

「うわ!ぐ、ガ……あアあアアー!!」

「さ、とう…さん？」

「ぐは、は……ハどRI……くぎAAAAA!!」

佐藤さんが意味不明な悲鳴をあげながら、まるで体を半分潰された蟻のようにのたむちまわる。

「こ、これは…」

僕は降りてきたアーミルさんに視線を送るが、彼もわけがわからないといった顔をしている。

「HAD……り君。矢……ヤァ！」

「矢！？佐藤さん、矢がどうしたの！？」

「矢デ、あたし…フォー！い、イイってー！」

「え？」

「矢で自分を射抜いてほしい。そう言ったのでしょ

「でも、僕にはそんなことできないです！」

「Oネが……イ、だか…ラァ！」

「健一君！」

アーミルさんが叫ぶ。

「今しか彼女の中にいる奴を倒すチャンスはありません。どういう理由かはわかりませんが、彼女の意思が表に出られている。この隙にシャドウを射抜くのです」

アーミルさんはぼくの背中の弓矢に触れると、不思議な言葉を紡いだ。

「これで準備はできました。これで、貴方の矢も妙さんに貸した剣と同様の力を持ちました。これで射られても彼女の魂は死にません

！」

「はーやアアくうう!!」

「佐藤さん…」

「ぐ、グウ…。そ、そうはさせんZO！」

『！！』

「ま、まさかあの一撃が……娘をお……起こす手立てになったとはあぁー！」

あの一撃？

さっきの衝撃のことか！？

「健一君、急いで！悪魔が完全に復活する前に！」

「さあせえるうKa-！」

シヤドウが最後の力を振り絞って僕に突進してくる。

僕は静かに弓を構えた。

いつもやっていることを思い出せ。

弓道の基本は、武術の基本は集中力。

目をつぶり、頭の中を空っぽにするんだ。

余計なことは考えず、今自分の目の前にあるものを正確に射抜いたところを考える。

僕は矢筒から最後の矢を取って、構えた。
もうすぐ夜が明ける。

月よ、長年地球を照らし続けた月光よ…。

「僕に力をわけてくれー！」
パシュ！

甲高い音がして、矢が放たれた。

疾風のごとく風を切り裂き、月光の輝きを乗せて。

アーミルさんの聖なる力を乗せて。

伊東さんの優しさを乗せて。そして――

そして、僕の貴方への気持ちを乗せて。

Last days

「こんにちは」

佐藤さんは今日も市民体育館にやってきた。

彼女はもはや、すっかり弓道部ではお馴染みのキャラになっていた。調子に乗った部長と園田が何を思ったか、彼女に弓を持たせてつきつきりで教えていたこともあったな。

その後、ちょっとしたセクハラ問題が発生して女子にボコボコにされていたけど。

「今日はずいぶんと遅くに来たんだね」

弓道部の女子達がそう言いながら佐藤さんに群がる。

「今日はちよつとね」

佐藤さんは舌を出しながら言うと、僕のほうを向いて手招きをする。

「どうやら個別呼び出しのようだ。」

「やっぱりあの二人って付き合ってるのかなあ？」

「絶対そうだよ。この間は否定していたけど」

「くそー！羽鳥の奴、羨ましいぞー！！」

「部長！羽鳥の野郎、締めてやりましょうぜ！」

弓道場を後にする僕の後ろで部長と園田がそんな会話をしているのが聞こえた。

あいつら、悪魔に乗っ取られていなくても本当にアホだな。

「この辺でいいかな」

佐藤さんは角を曲がった更衣室の前で足を止めた。

「来るなりどうしたの、佐藤さん？」

「今日さ、部活終わったらそのまま二人で隠れてよう」

「……は？」

僕は言っている意味がわからなかった。

「いいから言うとおりにしなさい。わかった？」

「はあ、まあいいんだけど……」

僕は訳がわからないままとりあえず頷くことにした。

部活終了の時間になり、僕達は帰るフリをしてそのまま市民体育館の裏口に隠れていた。

完全に皆がいなくなったのを確認してから、僕達は守衛さんが鍵を閉める前にもう一度中に忍び込んだ。

館内から完全に証明の明かりが消え、暗い建物の中を僕は佐藤さんについて歩いていった。

「とうちゃくく！」

「ここって、弓道場？」

暗かったから気づかなかったけど、佐藤さんはどうやら僕を弓道場に連れて行きたかったようだ。

「道具、持ってるんでしょ？」

佐藤さんは貸して、と言わんばかりに………というか既に奪い取るようにして背中の弓を取り出している。

ストン！

暗がりにも関わらず、佐藤さんの射た矢は少しはなれた的に綺麗に命中した。

「お見事！」

僕は外に漏れないように小さく拍手をする。

「また、羽鳥君とこうしてここで会うとは思ってなかったよ」

佐藤さんは小さな声でつぶやくと、弓を床の上に置いた。

「あたしさ、君に胸を触られたときは『二度と君のいるところには近づくか』って思ってたんだよ」

「そうだろうなあ……」

僕は苦笑しながら、後ろ頭を掻く。

佐藤さんはそこでキツと僕を睨みつけた。

「今一度聞くよ。あれは、本当にあたしを助けるためにやった行為なんだね？」

僕は笑うのをやめた。そして、小さくだけ真剣な眼差しで首を縦に振った。

「なら、もういいよ」

僕を睨みつける佐藤さんの顔がフツと和らいだ。

「それなら、この一件についてはもうおしまい。水に流そう」

「そ、そんな簡単に流していいの!？」

女性にとっては耐え難い出来事のはずだろうに、佐藤さんは僕の表情一つでそれを軽く水に流そうと言うのだ。

僕が女だったらそんなことは絶対にしないだろう。

「あたしがいいって言ったらいいんだよ。くだらないことをいつまでもうだうだ気にするのは性に合わないし」

佐藤さんはそう言っ僕の前立ち上目遣いで僕を見る。

「ほんと、言うたさ…」

佐藤さんの目線が僕から違うところに移る。

「頭の中では、わかっていたんだ。あんな話をしていれば悪魔が必ず手を出してくるのは。以前に悪魔の手引きを見ていながらそのことにまったく気づけなかったあたしの油断が招いた出来事なのに、羽鳥君はあたしに嫌われることを覚悟であんなことをした。そりゃ、その時は酷く裏切られた気持ちになったけどね」

「佐藤さん…」

「そのせいで、悪魔は計画を早めたんだと思う。まあ、そのおかげで体に乗っ取られても内側から何とかすることができたんだけどね。先生の言ったとおりだよ」

佐藤さんはそう言っ笑う。

「今回は本当にありがと。羽鳥君がいなかったら、あたしもこの世界も恐ろしいことになっていた」

「……………」

「君の気持ち、届いたよ。すごく暖かった」

佐藤さんは優しく微笑んだ。

「でも、その気持ちは受け取れないなあ……」

「え？」

思わず声が出てしまった。

どうしてこんなときにだけこんな情けない声が出るんだろう。

「当然じゃない。だって……」

佐藤さんの声の調子がさっきとは変わって明るくなる。

「このあたしを辱めただけじゃなくて、弓矢で二回もあたしを殺したんだから。当然、それなりに償うのが定めってもんでしょ」

「へ……？」

僕は文字通り目が点になった。

それってつまり――

「ま、全てを償い終わったら考えてやってもいいよ。ただ、あたしは好みが激しいけど」

「うん、うん！それでいいよ！」

「な、何よ急に元気になって！まったく、いい気になるんじゃないっつの！」

佐藤さんはうつとおしげに僕の顔を弓の弦でつつくが、今の僕にはまったく痛くなかった。

「これからも一緒にいていいんだよね」

「いつセクハラされるかわからないからナイフの練習しとかないかね。ついでに殺人鬼だし」

「厳しいなあ、佐藤さんは」

やっと戻ってきた日常。

僕達はこれからずっと、この日常を当たり前として暮らすのだろ

う。

今までもそれが当然だったように。

しかし、忘れてはならない。いつも側にある日常には、その中に混じって非日常があるということも。

でも、その非日常のおかげで、僕達はここにこうしていられる。

F i n

P o s t f a c e

英語のタイトルで書かれると『何のこっちゃ？』『まだ続きがあるの？』とお思いになるかもしれませんが、実は何もありません。ただのあとがきです。英和辞書を引いたらでてきました。やはりコンピュータは早いです。

というわけで前回に引き続き今回もあとがきとキャラ紹介を二回に分けて書きたいと思います。

まずはあとがき。

今回のムーンナイトは前作に比べるとどちらかというと本格派の格闘ゲームに近づけようという試みのもとで書いていました。キャラがけっこうそれらしい必殺技や決め台詞を叫んでいたのも、それっぽさは出せているとは思ってます。出せてなかったら、もっと出せるように努力します。

主人公については前作よりもかなり気弱君にしました。まあ、相棒がだいぶ走っているのでバランスはちょうど良いかと思えます。私もけっこう女の人には尻に敷かれているほうなので彼は書きやすかったです。あとはもうちょっと弓道部のことについて知識を仕入れておくべきだったかな。

今作は設定上『月明かりのスポットライト』の一年後ということのでそちら読んでくれている方にとっては『ああ、こんなシーンあったな』とか思っていたただけたかもしれませんが、新規で読んでくださった方は何かなんだかわからなかったと思います。というわけで『真夏の夜に覗く影』から読み始めた方にはぜひ『月明かりのスポットライト』も読んでいただきたいと思います（宣伝がオチですよ！）

それでは、最後までありがとうございました。引き続きキャラ

紹介をどうぞ。

Wolves of a moonlit night (月夜の狼達)

それでは引き続いてキャラ紹介いきます。

羽鳥 健一・・・今回の物語の主人公。前作の主人公向井一樹と比べると若干大人しいところがあるが、今時の少年にはない勇氣や度胸を持っているが作中では序章でしか描かれていない。

佐藤 都子・・・前作に引き続き登場。父親の仕事の都合で北国の高校へと移ったが、須磨高の友人達とは今でもメールをしている。明るくはっちゃけた性格をしているためか新しい高校に移ってもすぐに馴染めている模様。現在はWスポーツ部ウィンターに所属している。グラビアイドル並にスタイルがよい（羽鳥・園田：談）

伊東 妙・・・この世界に堕ちた悪魔をほろぼすためにやってきた天使に憑かれた女の子。天使と分離することもできる。普段は高校でクラス委員長をやっている。まじめだがある程度の冗談は通じてくれる天然さん。趣味は読書。

アーミル・・・妙に憑いている天使。任務とはいえ天使は人間に害を与えるべからずという天使界の掟を破って妙に憑いてしまったことをいつも悔いている。優しく妙以上に天然が目立つ男性。

シャドウ・・・光に化けて都子に憑依した悪魔。都子が眠っている間に人間の魂を喰らい、下僕を増やして天使界を牛耳ろうとした。

園田・・・健一の幼馴染。ありがちな設定だが幼稚園からずっと違うクラスになったことがないほどの仲。部活も一緒の弓道部。

非常に暑苦しい奴だが、それも友達を思っていることなので悪気はな
いはず？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4423b/>

ムーンナイトウルフ～真夏の夜に覗く影～

2010年10月8日11時18分発行